

5.6

日本國體

西晉一郎述

特249

55

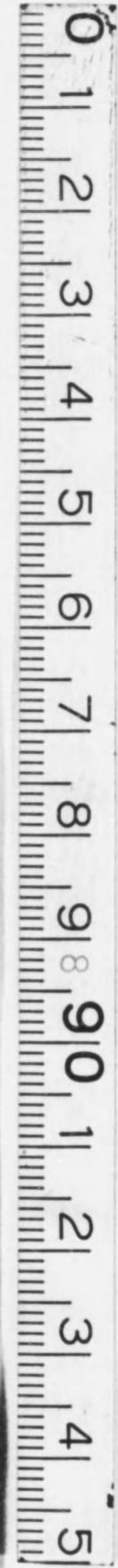
198

0/0

憲法教育資料

30

14



始



特249
198



文學博士西
晉一郎述
本國體

文部省藏版 憲法教育資料 普及版

日本文化協會發行



本書は昭和十年七月中旬本省憲法講習會
に於ける文學博士西晋一郎氏の「日本國體」
と題する講演の速記を博士の訂正補筆を
經て上梓したるものなり。

昭和十年九月

文
部
省

目次

- 一、國體觀念の由來……………一
- 二、民族の性情と歴史……………一五
- 三、祭政教一……………二七
- 四、國家的統一の具現について……………六〇

日本國體

一、國體觀念の由來

國體のことを御話しますことは御互に自分自身のことを語合ふといふことでありまして、日本の國が今日かういふ風に在るといふことが即ち國體が嚴然として在るといふことを語つて居るのであります。又日本の國がありますから、私共が今日かういふ風に暮して居る、吾々が存在して居るとすると日本の國が國體があつて存在するといふならば、吾々自身の存在が即ち國體である。是程身に近いものはない譯であります。すると吾々から言へば國體が一番の現實的のものである、現在の最大な存在である。さういふ譯です。然るに何故其の國體といふことを語合はなければならぬかといふことには又事情があるのでありまして、國體は事實ではありませんけれども、普通現實と申しまする感性に遡へてさうして現在眼の前に見たり聞いたりするといふ事實と違ふ點がある。即ち國

體は歴史のものである。そこで歴史のものの性質は一方から言ひますと最も現實のものですけれども、又他の方面から言ひますと現實でない所がある。國の歴史と國體は全然合ふといふ譯でなくして國史の事實は國體に副はなかつたことが色々あつたのでありますから、唯事實の詮議ばかり集めると日本の國も必ずしもさうではないのである。國體と言つて居りますものに副はないことが多々ある。すると國體と國史とは全然一致するといふものではない。然るに又全然國體を離れない。若し全く離れてしまひますれば日本の國の歴史でなくなるのでありますから、他の國の歴史になるのであるからして、矢張國體といふものは緩やかのものであつて、さうして綱を握つて居る所があつてしつかりと手綱を握つて居る所があるからして、そこで國の歴史的事實が國體に違ふことがあるやうであつて違はない。さういふものが一般に歴史の性質であらうと思ひます。新しい言葉で言ひますと國體は即ち國史の規範である。規範は半ば事實で半ば事實でなくして、さうして其の事實といふものを作つて行く、率ゐて行く。さういふ原理である。又それをもつと吾々に近い言葉で言ひますれば、國體は即ち國民の信念である。誰も信念は有つて居る。信念がありませぬければ其の人の人たる所もはつきりしないのでありますから、何かの信念は誰も有つて居る譯です

れども、併し日常の生活は一々其の信念の通りには行かないのであります。或は其の信念に違つて居るやうなことが多い所もある。併し全然其の信念に違つてしまへば其の人の面目といふものはなくなつてしまふのですから、矢張信念といふものが其の人を率ゐて居る。謂はば國體も矢張さういふやうな性質のもので國の歴史を率ゐて居ります。個人の信念は有つて生れたものでないのではありませんが生れ付きといふものを離れることは出来ない。それが總て本ではありますけれども、併し生れながらそのままの信念といふものはない。これは矢張養成したものであり、修めて得たところのものであります。國の信念であります國體も矢張唯天然自然のものではない、唯民族の生れ付きである天性であるといふものではないのであります。矢張是は養はれたものである。即ち歴史のものである。養はれたものは始終養はなければ育たないのであります。生れ付きといふものは自分で修めたものでないのでありますからして、又自分で修めなくても無くなるものではない。天から與へられたものは人間が骨を折らなくても天然の儘であるのであります。人間が骨を折つて養ひましたものは絶えず矢張努力してそれを維持して、即ち修めて行きませぬとそれが廢れる處があります。つまり努むれば其のものがありますし、怠れば廢れるといふのが又歴史の性質

である。若し其の努めることが不十分である、全く怠りますると即ち歴史が亡びる。歴史が亡びるといふと其の國として存続することが出来ない。一個人も信念をまるつきり失ひました時にはもうその人ではなくなる。國體はさういふ性質のものと思ひます。

國體といふ言葉でありますが、是は例の水戸の會澤の「新論」といふ書物に國體といふ字が出て居ります。國體といふ文字は是が始まりではないのでありませうけれども、只今意味して居りますやうな國體といふ意味で此の文字を使ひましたのは、文政年間に拵へました本であります。多分會澤のそれに出て居るのが國體の字の初のやうであります。尤も會澤の師の藤田幽谷も既に國體といふ言葉を用ひて居ります。それで、國體といふことはどういふ意味であるか、段々會澤はそれを論じて来て、さうして「國の體たるそれ奈何ぞや」と言ひますのは、一體日本には昔から外國の教、文物制度といふものが廣く入つて来て居る。儒教も入つて居り、佛教も入つて居る。又近くは基督教といふものも入つた。そこでさういふ思想に可なり日本人が左右せられて居る。思想のみならず實際の制度の上にもさういふものが餘程力を有つて居る。そこで動もすれば日本は支那であらうか、印度であらうか、西洋であらうか、抑々國の體たる何處にあるか、かういふことを言つて居

ります。さうすると國體、つまり國の體たる所といふ意義であらうと思ひますが、その國體論の開卷第一に、帝王が天下を治めて、さうしてそれが唯一時的でなくして永い間國が安らかである、久しい間國が治つて動かない。動搖しないといふのは威力を以て天下を抑へて行くといふのでなくして、萬民が心を一にして上を親しむ。其の上を親んで離るるに忍びざる實、寔に頼むべきなり。かういふ事が國體論の眞つ先に書いてあります。上とか帝王とか言ひますのは一般の言葉が用ひてあるけれども、勿論日本の國體を論ずるのでから日本の天皇のことを申して居る。それで日本の人民が大勢ありまして、或點に於て心が一である。其の上を親んで離るるに忍びざるところの實とありますのは多分情といふ意味だらうと思ひます。忍びざるところの情といふものが是が寔に頼むべきなり。力も勿論必要であるが、愈々の場合に眞に頼みとなるのは即ち此の離るるに忍びざるところの情である。さう書いてあります。さうして其の次のことは、此の國が開けてから此の方一姓歴々、此の四海に君臨して未だ一人も他姓の者が天子になつたことがない、さうしてさうであるのは豈それ偶然ならんや。漢文口調であります。それはフツとさうなつたといふ譯ではない。是だけのことが「新論」の一番初に書いてあります。しますと、國體といふことは言ふ迄もなく國家

統一のことが眼目となつて居る。身體で言ひますると四肢五體皆身體でないものはないからして、國にも四肢五體、國の生活は残らず皆國體を現すのですけれども、今此の言葉に依りますと、先づ以て國の統一の淵源するところ、何に依つて國が統一せられるか、それが國體の最も大事な點である。つまり國體といふのは、今日の言葉で言ひますと國家的のものが中心である。さうして其の眞髓は何であるかといふと、吾々國民の一人一人の方寸の中にあることである。心の中にあるところの一つの感情である。國體は畢竟一箇の感情である。さういふ意味になるのであります。其の感情といふものを何處に向けるかといふと、即ち天地開けてより一姓歴々、一人も他の者が天子の位に上つたことがない、其の一姓歴々の天子に其の感情が向つて行く。それが國體の眞髓とするところである。さう申しますると今更聴く迄もなく吾々が如何にもさうであると承知するところでありませぬ。それでは、どうして自分自身に分り切つたことをさういふ議論が出るか。それは申す迄もなく幕府の中葉から内憂外患、内に於ては幕府の力が弱くなつて政治が十分の統一を得ない、殊に對外的にむづかしい問題が起る。そこから矢張自分自身は何であるかといふ反省が起る。是は何も水戸の學問ばかりでなくして諸方にさういふ思想が起つたのであります。水戸學はその有力なる

もの一つである。すると國體といふ考は、會澤に言はせますと色々異物に觸れた時に起るのであります。何も混ざるものがなくして一から十まで自分自身ならば自分といふことを別に氣付かないのですけれども、自分と違つたものに觸れた時に自分といふものに氣付く。さうしますと日本の歴史に於ては是が始めてのことではないのであります。異物にすつと昔から接したのである。そこで國體といふ風なことは新しい言葉でありましたが、言葉は違つてもそれと同じ意味のことを吾々の祖先がすつと昔に言つたのである。即ち國體思想の歴史といふものがある譯であります。其の歴史に一番はつきり出て居りますのは神道といふ言葉であります。それは日本書紀の用明紀に出て居るそれから古道といふことも次に出て居る。それから孝徳天皇大化新政の時、孝徳紀には「上古聖王の跡に従つて天下を治むべし」といふことが出て居る。是がつまり日本が自分自身といふものに氣を付けて、さうして異物と區別する爲に自分に名を付けたことの表にはつきり出て居る所である。其の時代は外國の文物が盛んに入つて來ました。つまり佛教といふものが盛んに入つて來た。それ以前に儒教も入つたが、儒教の入つた時にはそれに對して日本人的の自覺がどうであつたかといふことは歴史に見えて居らないのであります。儒教も入り、續いて佛教が入りまして其のものが段

々盛んになつて来る。其の時に丁度固有のものといふので古道、新に他から入つて来たものでない日本固有といふ意味で古い道、それを又神の道といふ、さうしてそれが上古聖王の跡に従つて天下を治めるといふのでありますから、矢張國家統一のことである。唯普通に言ひまする宗教であるとか道徳であるとかいふことも籠つて居るのであります。今日のやうに分けますと矢張國家統一、それを中心としたことである。さういふ事が既に昔に出たのであります。其の神の道といふさういふ言葉が出てから千二百年の後の明治初年に又惟神の大道といふ言葉が出て居ります。惟神の大道に従つて政治を爲さる。さうするとここに千二百年を隔てて矢張昔の通りの言葉が出て居る。又隨つて其の言葉に盛られて居ります感情、思想といふものも同じものであつた譯であります。其の中間に色々の思想が起つて居る。儒教、それから佛教、儒佛の勢力の消長は色々あつたのであります。先づ初に佛教が中々盛んであつた。其の時には佛教的の神道と名を付けても宜い。さういふものが主に佛教徒の方から出て来ました。これは矢張他所から入りました佛教といふものが我が國に勢力を有つたためには、どうしても日本の國柄といふものに適應しなければ十分に勢力を有つことが出来ない。其の儘では國民に徹底することが出来ぬといふところから、其の佛教といふもの

を在來の國民固有の信仰といふものと融合するやうに取計つたものと思はれるのであります。併しさうしたから其の言つて居ることが嘘であるといふ譯ではない。矢張そこに眞理があつた譯であります。それがつまり又日本の國柄を現すので、異物に接して自分自身を自覺しましたもそれで異物であるからまるつきり除けてしまふ、かういふことをしないといふのが日本の風であります。そこでそれを採入れる。外から入つたものが此方に適應するやうに、佛教は外から入つてから佛教徒の方が日本に適應するやうに、佛教的の神道を唱へる。それから又すつと後に、徳川時代になりますと儒教が盛んになつて来ました。是も儒教のみでやつてそれを主張した者もありますけれども、矢張それではいかぬ所がある。日本固有の信念といふものと一致しなければならぬ。そこで今度は儒教的の神道と言つてよいものが起つて居ります。是も何も間に合せといふ譯ではない。矢張儒教といふものを全然退けない。良い所があるからしてそれを採るけれども、其の儘ではいかぬから矢張日本風に儒教を採るといふ眞面目な努力でありますから、決して宜い加減な牽強附會な事を言つた譯ではないのであります。其の一二の細かい説に於ては成程附會的なこともあるかも知れませぬけれども、全體の性質は日本人の性質を現して、外來の良い所は採入れて自分自身のものは失はな

いといふ流儀が出て居るのであります。これは矢張大事なものである。日本の歴史に於て今日在るに貢献したものである。又其の中間には皇室に最も近い關係のあります所の公卿の家、又神祇に親しく仕へて居ります神官の家、さういふ方面から一種の神道といふものが出て居る。それは其の人に依つて或は佛教を多く取る人もありますし、或は儒教、尙ほ他の支那の思想なども採つてそれ／＼神道を立てて居る。是は王朝の末から鎌倉室町時代の寧ろ中間に發達しました説であります。是等も矢張其の精神は同じことで、唯其の説の立て方が何程か違つて居る。さうしますと先刻水戸で國體といふことを申しましたと其の同じ事がすつと昔から次々に起つて居る。かういふ風な事は他國にもまるつきり例がないではありませんまい。矢張他所でも文化の融合といふことは廣くあるのでありますけれども、かういふ著しい現象といふものが特に日本にある。さうして其の中心點は何であるかと言ひますと、所謂一姓歴々の天皇、それに對する上を親んで離るるに忍びざるところの情、是が中心である。さういふことを昔ながらの言葉で表してありますのが現人神と治しめす天皇、或は又惟神治しめす天皇、さういふ言葉で表してあります。こゝにも矢張治しめす、國を治めるといふことが出て居ります。國家的のものである。今日の言葉で言ひますと政治的のも

のである。さうして現人神、或は惟神といふところに其の政治の淵源がある。其の政治をなさるのが天皇である。此の三つの言葉の中によく國體といふものが現れて居ります。かういふことは從來の國體論者、日本の國を論じました總ての人の定論と言つて宜い譯で、之に對して誰も異存はないのであります。さうして一番近い者は誰であるかといふと、幕末に於ては色々ありましたが、先づ今申しました水戸學が矢張其の有力なる一つの代表でありまして、國體といふ言葉を設けて論じて居るのであります。

それから明治の初年になりまして勢力のありましたのは即ち神道であります。此の神道と申しますのは、今申しましたやうな儒教的であるとか、佛教的であるとかさういふものでなくして是は全くさういふ外來の思想といふものを除いてしまつて、純粹の日本固有の信念といふものを明かにする、我が太古民族の固有の信仰を純粹に明かにするといふ學問が徳川の中葉に起りました、是が所謂國學とも稱すれば、古學神道とも稱するものであります。是は日本の歴史に於て注意すべき極く大事なことであります。此の國學といふものは日本國全體に取つて重大な意味を有つて居る。勿論從來の色々な神道も矢張同じところを捉へて居るのでありますけれども、それは要するに其の説を爲す説

の構造の上に於て外の思想を借りたのであります。國學の方は純粹に此の日本のことを明かにしたものであります。水戸學の如きも大に其の影響を受けて居る。其の國學といふものが明治初年には最も勢力を有つたのであるが、間もなく西洋の思想が押寄せて來まして十分に國學の意味を政教の上に發揮することが出来なかつた。政治道德教育の上に十分に發揮することは出来なかつたのですけれども、併しそれが矢張根本となつて決して廢れては居らない。其の頃の有力な國學者の一人が矢野玄道であります。是は明治政府を樹てられた際、政治上の有力な人々の顧問となつていろいろ建議した一人であります。此の人の言ひましたことが其の當時直ぐには用ひられなかつたのですが、段々明治政府に於ては其の建議の趣意を採つて居られる。今日日本の制度で矢野の建議しましたことが實行されて居ることは澤山あります。さういふことは矢野のことを書いた書物にもあります。是は矢野に限らず矢張神道家といふものが勢力を得たのであります。是は徳川時代の國學者、本居宣長のやうに何處までも外來思想を退けるといふ程の態度ではありませぬ。儒教といふものを餘程採つて居ります。是は外來のものだからと言つて表向きには排斥して居るやうですけれども、其の説の中身を見ると儒教が入つて居る。是は尤もなことで、儒教といふものは、元

來佛敎と違ひまして政敎の學問であります。即ち今日の言葉で申しますと、國家學と言つても宜いものでありますから、國家制度、組織のことに付ては豊富な材料があるのです。我が日本に於ても大化の新政に於ては矢張支那の唐の制度を採られたのであります。唐の制度が昔の儒敎の通りでないにしても矢張其の精神が残つて居るものであります。佛敎の如きは元來が心の問題でありますから、國家社會の制度といふことは段々説き及ぼすには説き及ぼしても、國家的、政治的のものではない。儒敎の方はさういふものでありますから、聖徳太子の十七條憲法も多分に儒敎が採り入れられてをります。それ故に政治を新に爲さるといふ明治初年に當つて、其の國學者が唯議論のみではなく、愈々實際の政治の顧問となる際に儒敎を考へざるを得なかつたといふのは、是は勢ひ然らざるを得なくなる、それに依らないと國家制度のことを十分に論ずることの出来ない譯のものがある。それで矢野の如きは儒敎を内々採つて居る。そして又西洋といふことも考へて居る。それは詳しく研究した譯ぢやないのですが兎に角西洋のことも採らねばならぬと考へた。それは日本の流儀で、日本は昔から色々他の良い所を採る國だから、西洋のことも棄ててはならぬといふことも言つたのであります。

それから其の次に憲法の制定せられました當時、是も其の方面に於ては色々ありませうが、吾々が直ぐ知ることの出来るものには、明治天皇に御進講して居られました元田侍講の進講録といふものがあります。是は今日誰でも讀むことの出来る、書物としては簡単なものであります。是は新に制定せられますところの帝國憲法といふものと、それからして此の日本の所謂國體といふものとの關係を其の根本の最も大事な點を明かにしまして、さうして天皇に進講せられましたものであります。其の要點を申し上げますと、そこにかういふ言葉があるのであります。「憲法三百、民法三千、一言以て之を蔽ふ、曰く天皇の愛民なり」さういふことがあります。それで此の憲法を新に制定せられまして、それを國家政治の軌道になさるのであります。其の憲法三百、民法三千を一言で言へば天皇の愛民、即ち民を愛せられます天皇の徳の發露であるのであります。それに依つてこの西洋といふものを参考にせられまして憲法を御立てになりました。其の憲法とそれから日本の昔ながらの國體といふものとの最も大事な點がそこでちやんと融合が出来て居るので、さうせられましたのであります。さういふ風に天皇に進講せられたのであります。若し其の法の中大事な權利といふことを取つて言ひますと、元田侍講の進講によれば、我が國には君權あつて民權なし、

若し權利といふことを假に用ひるならば、我が國には君權あつて民權なし。それでは憲法に御定めになりました民權、臣民の權といふものは何であるかといふと、民の分願を果す爲に——分願とは一人一人の願といふことだらうと思ひます、分願といふ言葉は元田侍講が用ひられましたけれども是は出典のある言葉でありまして、其の民の分願を果す爲に君權を以て民權をお定めになつたのである。それでありまして此の新に出来る憲法といふものと、それから日本の國體といふものと相違しないといふことを申上げて居られます。それから其の以後のことは段々今日のやうになるのであります。それでかういふ風に國體といふことに付て、昔から我が國には始終國體論と言つて宜いものが出て來て居ります其の來歴であります。

二、民族の性情と歴史

それから民族の性情、即ち生れ付きと歴史といふことに付て申しますと、天皇の方からは愛民の徳といふこと、又國民の方からは上を親んで離るるに忍びざるところの情、かういふものが矢張り日本人の生れ付き、性情といふものに根ざして居るに相違ないのであります。又天然の性情にない

ものを全然拵へるといふことは出来ないことなのであります。勿論人間が拵へたと言つてよいものがある。人間の拵へた物も實際は存在する。此の器械なども矢張人間が拵へたもので、事實あるにはあるのであります。併し天然といふものには是は餘程遠ざかつて居る。人為の上に人為を重ねて、人間の工夫の上に工夫を積んで出来たものでありますから、餘程天然と遠ざかつたものでありますけれども、是とても固より天然にさからつたものではない。天然の法則に従はねば出来ないのであります。今國體と申すことは歴史の中にあることと思ひます。歴史と申しますのは、天然自然のものに人間が附加へた所があります。人為といふものが入つて来る。併し人為と言ひましても、其の人為を爲すところの人間自身が矢張自分自身で拵へたものではないので天然のものでありますから廣く言ひますと天然に外れたものは一つもないのであります。其の中で、生れた儘のものと人間の修め養つて築いたものとの區別が立つ、其の天然のままのものには歴史はないと言つて宜いのであります。「ナチュラル・ヒストリー」といふ言葉があつて、イギリスで博物學のことをさう言つて居ります。さういふことは生物にも歴史があるといふことであります。吾々の意味する嚴密なものではないのであります。種といふものもあります。が精神的存続

がないのであります。歴史と言へばそこへ精神の入つたもので、其の精神とても矢張本は天與のものであります。天の働きに迫る程の靈妙な働きを有つて居る。そこが古來人は萬物の靈長と言はれるところで、人間の實に靈妙なところである。其の人間の靈妙な働きが加はりまして、天然に基くが天然の儘では出来ないところのものを澤山作つて行く。そこに文化とか、人文とかいふものが始まるのであります。國家は勿論文化、人文の最大なるものでありませう。すると矢張上を親しみ離るるに忍びざるの情といふものは、人情として天然にあるのでありますけれども、それを磨かなくてはならぬところがある。又さういふ天然の感情といふものを何處に向けて行くかといふことは、是は矢張天然の儘で行かない所があります。さういふ感情といふ風ものは天然自然の儘でありまして、其の感情を第一何處に向けるべきであるかといふことは、教に依らなければ決らないところのものであります。そこで歴史といふことと教といふことは終始するもので、教の立つところに歴史が始まる。歴史の發展するところに教といふものが行はれる。さうすると教は昔の言葉で言ひますと、天人合一——天と人の融合に依つて出来たものである。それで始めて人間世界と大自然界と區別する。其の大自然界の中で特に人間の世界、歴史の世界といふものが開けて

来る。すると、さういふ上を親しむところの情といふものも唯本能的の愛情でない。所謂一姓歴々の天皇に向つて其の親しむところの情といふものが集中するといふところは矢張歴史的のものである。唯放つて置いてそれで安心が出来るといふ譯でない。親愛といふものが何處に向いて行くか分らないところのあるものがある。そこで氣を付けなければならぬ。つまり國體論といふものが昔からあるのもさういふ譯であります。今日もさういふ譯であらうと思ふのであります。

喜怒哀樂といふ風なものには是は吾々の拵へたことでないのでありますから、隨てかういふものは別に修養しなくても自然に起つて来るのであります。それが廢れるといふことは決してない、生きて居る間はあるのであります。然るに其の喜怒哀樂を能く統制して、さうして親子の道であるとか、夫婦の道であるとかいふものを立てます。支那で言ふと仁義といふものが人間の拵へごとでなくして、天性に根ざすところがありまして、仁義といふものは衰へることのあるものであります。喜怒哀樂といふものは衰へもせず、盛んにもなるものぢやないのであります。併し仁義道德には盛衰がある。そこが違ふのであります。國體にも矢張國體自身は動かぬものであつても、それがどれだけ實現せらるるかといふことには盛衰がある。即ち國の治亂隆替といふものがそこに在る譯であります。

ります。

先づ人が歴史といふものを始める。其の一番初は申すまでもなく衣食の道であります。それで、吾々が今日生きて居るといふのは、日本人でありますと米を食べて居るのであります。日本人の生きるといふことは即ち米を食ふといふことである。吾々が今日米を食べて居るといふことは是は三千年の歴史を豫想して居るのであります。猿が木の實を取つて食べて居るといふのは違ふ。何千萬の人が皆米が食べられるといふのは、全國に水田といふものが開けなければならぬ。それは野生的の天然のものではない。國が開けてから以來、國民の努力に依つて農耕の道が開けて、さうしてそれに依つて今日吾々は米を食べて居るのであつて見れば、其の衣食といふものが長い歴史を豫想して居る。其の歴史がなければ日本人が毎日米を食ふことは出来ないのであります。吾々の足許といふものはすつと淵源するところがある。其の淵源するところあることを知つて、それを維持することを忘れないのが即ち人の人たるところだらうと思ふのであります。所謂其の本を忘れない。農業は先づ人文の中で一番自然に近いものだらうと思ひます。人間が人間を相手にするといふ分量が少なくて天然を相手にするといふ分量が最も多いものである。其の天然といふものには嘘

のないものでありますから、農業生活といふものは自然に人に努力することを教へる。教へるとはなしに教へる。胡麻化して米一合も澤山作るといふことは出来ませぬ。矢張するだけのことをしなければ稲の色が良くならぬのであります。米一粒も決して口を上手に使つたからそれで出来るといふ譯でないのであります。最も天然の秩序に従はなければならぬ。春夏秋冬勤勉でなければならぬのであります。收穫といふものは意外の收穫といふことがない。極く質實なもので、思ひ設けない澤山の儲けはないのであります。隨て農業の生活は農業者自身が簡素な生活をするといふことになりませんが、併し段々人が多くなりますれば、自給自足ばかりで行きませぬから所謂交換の道が起る。交換することを市といひます。西洋で英語の「シチイ」は矢張市といふ意味であります。市が「シチズン」といふはその市の住人のことでもあります。「シチズンシップ」といふことはアメリカの道徳全體であると言つても宜しい。アメリカ人の道徳は即ち「シチズンシップ」と言つて宜しいといふ其の「シチズン」、或は又西洋の政治的、英語で言ひます「ポリティカル」、是も市から出て来た意味のものであります。都市の一番本は何であるか、交換、商ふ場所である。物々交換が初でありませうが、物を交換するといふ所、即ち其處が人々の集合する所であります。これは矢張其の品物

は天然に作つたものですけれども、商ふといふことは人を相手にするところのものである。そこに智巧といふものがある。智慧、巧みといふもの起る餘地がある。智巧といふものがありませぬと矢張商ひが巧く行かない。そこで農業の生活と餘程違つた方に人々の性情といふものが發達するのであります。其の商ふといふことに於ては段々約束といふことが大事になつて來るのであります。約束なしではほんの品物を手から手に渡すといふことだけであつて、廣い活動が出来ませぬから、商業に於ては約束といふことが大事になつて來る。市といふものを基礎にし、商業といふものを基礎にして國を建てたといふことになりますと、國の基礎といふことは約束といふことになり、契約といふものにならざるを得ない。約束を守る、守らぬ者には制裁を加へるといふ、かういふことは生活の大事な形式になります。餘程農業と趣きを異にするところがある。勿論農商どちらも生活には必要ですけれども、自ら其の主とするところが國によつて違ふのである。さういふ生活の形式の相違は矢張天然に本づいて起るものであります。人間の爲すことは皆天然自然を基礎にするといふことを、餘り人爲が殖えて來ますと忘れ勝ちになる。何でも人間の智慧、細工で出来なものはないかのやうに思ふやうになるのであります。國家と言へば民族の大きな住居といふもの

それを全然人爲で、人間の頭で考へたことで組立てたものであるかのやうに考へ易くなる。然るに天然といふものは人間の如何ともすることの出来ないものであります。其の如何ともすることの出来ない天然を基礎としたものだといふことを考へますと、國の建て方といふものが違はざるを得ないのでです。吾々の住つて居る家でありまして、家の家たるところは世界中何處でも同じことです。矢張それが住へるやうになつて居りますから、それを家の眞理と言ふならば、家の眞理は世界を通じて一つですけれども、其の家がどういふ形を成して居るかと言ひますと、皆國々によつて建築の仕方が違ふ。或は建物の材料が違つて居ります。日本の家の柱といふものの其の一本といふものとそれから煉瓦や石を集めて造りました西洋建築の柱一本といふものが、此の柱一つといふもので日本の建築と、それから西洋の建築全體を代表して居る。日本と西洋とは天然が違つて居る、國土と草木に相違がある。それに従つて人間が工夫を施すのですから、隨つて違つた形式のものが出来ざるを得ない。又それでなければ家を建てる事が出来ない。又其の天然の上に工夫を施します人間頭といふものも、是も矢張民族の性情、性質があります。それは國內で同じ物を造るにしても、人によつて工夫の違ひがある。これは矢張其の生れ付きによる。すると民族にそれ／＼生れつきが

ありますれば、縦同じ材料であつても、其の材料を組立てるところの建て方が違ひさうであります。況して自然全體が違つて居るからしてそこで家の建て方が違つて居る。すると民族全體の家と言つてよいところの國家——國家といふことは非常に面白い言葉であります。國の家であります。國と家と併せました時は家國といふことを支那で言つて居りますが、これは國と家とであります。國家と言へば國の家であります。個人個人の住ふところの家が國に依つて違へば、民族全體の家であるところの國家といふものも、矢張組立て方が違ふのであります。それは天然が違ふといふことが根本であります。

支那の文物制度といふものは千數百年も昔から日本に入つて來たのであります。併し徳川時代には格別儒學が盛んになりました。そこで學問と言へば即ち漢學、道德と言へば即ち支那の人倫五常、それより外にはないものである、それが人類一般のものである。さう漢學者が考へたのであります。ところが支那の典籍の中に水土といふ言葉が出て來る。そこから氣が付いたといふか、それを借りたと言ひますか、寧ろ借りたのでありませう、其の皆尊敬して居るところの典籍の中に水土といふことがある。水土に依つて制度の建て方も違ふべきものであるといふことが出て居りま

す。すると支那と日本とは水土を異にするからして、支那の通りには行かない。支那の國の建て方が日本の國の建て方にはならないのである。其の水土、それに依つて大にしては國の家、國家といふものの構造が違つて来る。さういふところから、其の水土の考から段々先刻申しました儒教的の神道といふものも出たのでありますが、それから純然たる國學も矢張出て來た譯であります。その家で譬へて言ひますと、家は農業の家と、それから商家とは住へるところは一つですけれども建て方が違ふのです。地方農村の建て方とそれから都會の商業をして居る所とは家の建て方が違ひます。矢張さうすると國で言ひますと、一國である以上は農工商皆無くてはならぬのであります。併し其の中でも農業を本とする、西洋で言ひますとデンマークの如き國は商工業も大にあらでせうけれども農を本とする。イギリスといふ國は商業國である。「カントツリー・オブ・マーチャント」であると言つても宜い。今國內で農業の家の造り方と、商業の家の造り方と違ふならば、國の家である國家も、商業を以て國民生活の一番大事なものにして居るといふ國家の構造の仕方と、農業を其の民族の生業の根本にして居るといふ、さういふ國の家である國家と、何處か構造が違ひさうなものであります。さういふ國といふ大きな家の一番大事な點を、それを丁度家に大黒柱と

いふものがあるやうに、矢張國の御柱といふ古い言葉が日本の古い書物にある、その國の御柱といふものを御立てになつた。それを本として國土を経営せられる。國土經營といふことは即ち國家を立てられるといふことなのであります。矢張國の御柱といふものがある。眞ん中の柱といふものがある。それが其の建築の根本となります。何處に國の柱といふもの置くか。今日でも紀元節の歌に「國の御柱立てし世を」と吾々が歌つて居ります、それが即ち國の根本の柱であります。其の大黒柱の置き所です。そこが農業の家、商業の家で違へば、矢張國の資生産業、廣く國土の形勢民族の性情等に依つて違ひさうなものであります。それがつまり國體といふことの本なのです。さうしてここには建てるといふことが用ひられます。建てるといふ言葉がそれが歴史を現すのです。天然のものは生えるのであります。自然に生えて來る。立てるといふのは人間の働きが加はつて居る。國の御柱を御立てになる。それは即ち歴史なのであります。是は支那の言葉で言ひますと極を建てる、さういふ言葉があります。極といふのは即ち先づ國の御柱と言つて宜い譯であります。國を開き教を民に施すことを、極を建てる、と言ふ。其の極を建てるものは皇であります。さういふことを建てると言つて居る。但し教育勅語には徳を樹つると樹といふ字面が見えてをります。樹

立するといふやうな言葉もそこで又使ふやうになる。そこで樹といふのは支那の文字を借りたのでありますけれども、併し是が歴史といふものは矢張天然が本であつて、樹てると言つてまるきり人間の拵へごとではない、天然を基礎にして居る。そこで建てたものは人間が建てたものであるけれども、それは恰も地から生え抜きの如くに動かないものになつて居る。建てたものであるけれども、それが天然と全く一致して来る。それが即ち樹立でありますから、一寸會を設けたからと言つて樹立とは言へない。それを二十年、三十年もやつて行つて、もう動搖する憂へがない、地から生抜きのやうになつたといふ時に始めて樹立なので、今日會を開いたからと言つて樹立とは言へないのであります。其の樹つるといふことが、國の柱を御建てになる、そこに天然に基いたところがある。そこに國體の意味があるのであります。其の國の生活の成行から段々初は農業でありまして、商業といふものが一番大事なものになるといふ風なこともあるのでありますけれども、矢張其の初が終であるといふ點が決してなくならないのです。又それをなくしないといふことが大事なところであります。金額の上から言へば、商業といふものが大活動を爲して居る。農業は其の生産の高に於ては、金に見積ると、それよりはすつと少ない。かう言つても矢張それであるから商業立

國とは言へないところがある、矢張農業立國と言はなければならぬところがある。さういふことは唯金高の計算だけで言ふことが出来ない。矢張それが國の建て方といふもの、又民族の感情といふものに關係がある。色々な生活の方面に關係があることでもありますから、今我が國は農業といふものを以て、資生産業の方面から言ひますと、農を以て始つたといふことが第一のことである。

三、祭政教一

日本は清明心と君臣の道である。さういふことを慈雲尊者が言つて居られますが、先刻の億兆心を一にして能く其の上に親しみ離るるに忍びざるの實と言ひますのは、即ち分けて言へば清明心と君臣の道である。清明心が直ぐに君臣の道といふ譯でもない。君臣の道は勿論深く天然に基くのでありますけれども、是は立てたものである。歴史のものである。清明心は修養したものとは言はれないのであります。別に修めてどうなるものといふものではない。増減のないものなのである。但し之を明かにするしないといふところに人間の努力はあります。清明心自身は立てられたものでもなければ減びるものでもないのであります。其の萬古渝らぬところの清明心

といふものが、君臣の道といふものに集つて来る。そこで億兆心を一にして、能く其の上に親んで離るるに忍びざるの實といふものが立つのであります。養はれて來たのであります。つまり、傳統的な國民の信念なのであります。信念は生れかままに有つて生れて來ない。信念は矢張養つたところのものである。我が國の君臣の道は矢張歴史のものであるけれども、其の道の道たるところは萬古渝らぬところがある。現實に於ては或は盛んとなり、或は衰へましても、天性に根ざすところがありますから、そこを取つて渝らぬところのものであると言ふのであります。それに付ては先づどうしてさういふ風に立てられて居るかといふと、自然といふことと人の創造といふことが實に我が國では一續きになつて居る。或は支那の教、又佛教でも、或は又其の他の教でも、さういふものと比較して日本の國の成立を見ますと、日本は如何にも自然の國である、自然的のものであるといふことを言ふのであります、さういふところから、先刻申しましたところの例の徳川時代に發達しました國學は支那で自然のことを強く言ひました老子、莊子に似たところがあるといふやうな批評を受けたのであります。如何にもさういふところがある。併しそれは支那の老子から取つて來たのでありませぬ。勿論人爲はありましても、其の人爲といふものが如何にも自然に従つて居

る、餘り拵へることが多くない。我が國では先刻申しました惟神の道がある。神の儘にといふことであります。其の神が日本の國の根源である。日本の國を開かれましたのは神でありまして、神が國を開かれましたことが國を御産みになつたといふことと一であり、國土經營、或は古い書物にありますが修理固成といふことと國を御産みになつたといふことと一であります。日本の國土が出現したといふことは即ち日本の國家が出来たといふことである。天然の國土の現れたといふことと、國家といふものの成立といふことが一續きになつて居る。別の原理に立つて居らない。即ち是は一番古い日本人の信念なのであります。一番古い言傳へを能く調べるとさういふことになつて居る。日本の國の開けましたことを天地開闢とも言ふのであります。國土の開けるといふことは日本人から言へば即ち天地開闢なのである。それで今天體といふものがある、其の中に地球がある、其の中に色々の生物もある、人間も居る。其の中に種々の人種がある。其の中に日本人もある。かういふことは如何にも眞つ直ぐな考のやうであつても、是は後から拵へた考なのであります。直き／＼に經驗したことではないのであります。外界といふものがあります。かう言ひますのも我が目で見、耳で聞いてのこととあります。吾々の頭の中で考へたものでないところの實際の自然界、吾々が實地

相手にするところの自然界は吾々が生れると同時に出来たものといふ意味があります。若し目が潰れまじたら世界の中で色の世界といふものは吾々になくなる。若し耳を損じたら此の世界の中で吾々には聲の世界はなくなるのでありますから、此の世界は生きた此の我が身體と共に現れ、共に滅するといふ意味を含んでをります。吾々が實際に相手方として居るところの世界といふものは、吾々を超えてあるとも言へますが、又世界は吾々と俱生俱滅である、さういふ意味もあります。

人間の抽象思想は現實を離れて、そして色々の大きなことを考へるのであります。太古の素朴な人間が自分の民族を人間全體と考へる、自分の國土の開けたことを天地の開闢と考へるのは如何にも正直なことなのであります。何等の抽象も推理もないのであります。極く眞つ直ぐな考へのであります。そしてそれは今日に於ても現實的に其の通りなのであります。それを吾々が忘れるといふことになると、吾々の實際の目で見、耳で聞き、手で握りそして御互に顔を見合せて話を仕合つて居るといふことは我あつてのことなのであることを忘れるといふことになり、我を姑く措いて世界といふものを考へる、人類を考へる、それから他人を考へることになる。成程是はさう考へなければならぬ必要もある。日常の生活には抽象といふことがなくてはならぬのであります。今日は

何月何日、そして何時に此處に集る、それが合ひませねば此の仕事が出来ませぬ。併し太陽系の中で別に何月何日といふことはないのであります。何月何日は太陽系に基いては居るけれども、何月何日は曆の作り方で變へることが出来るのであります。春秋が別に太陽にある譯でもなければ、地球にある譯でもない。さういふことは人間の立てた名であります。併し勿論勝手に拵へたのではない。自然に即して立てたものであるが、さう立てなければならぬ人間の生活の必要上、何月何日は矢張人間の立てた事であります。さういふことが人間の生活の便宜上必要なのであります。さういふ人間の立てたものをすつと極度まで押して行つたものが、即ち自然科学であつて、自然科学的知識の性質はさういふものである。だからこのものは、人生を利する、天然を利用してそれを役に立てるといふ方面に於て最も有力な學問である。併しさういふことの初は抑々農業を爲す時に何月の何日は種蒔である、さういふことを曆に書く、原始的の生活にもそれがあつた。支那の一番政治の初は曆を作つて天下に頒つといふやうなことが言つてあります。これが人為の初であります。併しそれは一面なであります。東西南北と雖も人間の立てたものなのであります。都合の好いやうに立てたものであります。天全體に東西南北もない。方角でも月日でも先づそれが人間生

活を營む基本になるのでありますが、それは人間の立てたものである。一番正直な天然自然であれば、自分が生れて、見る限りに於て色の世界があり、聞く限りに於て聲の世界がある。それと同じ様に、共に親しむ限りに於て友人がある。實際は多勢居りましても、吾々の感情が交らなければ友人といふものは無いも同然であります。矢張り心の働き、耳目口鼻の働き、精神、肉體全體の働きの上に吾々の環境たる自然といふものが成立して居りますので、それが太古の民族の信念であるから自分の國の開けたことが即ち天地の開けたことであるといふのは如何にも尤もなことであつて、同時に吾々が忘れてならぬことである。吾々の日常の生活にそれが働くのであります。それを忘れない、それで天然と人爲といふものが一續きのやうになつて居る。それが吾々祖先の信仰であります。それで其の天然自然といふものは何であるかと言ふと、此處では一寸勝手手のやうですけれども西洋の英語を借りますと「ネーチャア」と言ふのであります。「ネーチャア」といふことは生れるといふことであります。天然自然といふことは生れるといふことである。生れるといふことは何であるかといふと人間で言へば親子、親が子を生むのであります。自然的といふことが一番現れて居るといふものは親子で、親子といふものは自然の一番の現れであります。そこで我が國では神は國土、

草木、民族の親なのであります。即ち神が御産みになつたもの、さういふ信仰であります。そこで唯民族だけが親しい親類のみならず、日本人には此の日本の國土も、それから山河、草木も皆同じ神から出て居る。皆親しい同類である。國全體がさういふ一類である。國土草木民人が皆同じ根から生れて居るといふ、さういふことが日本人の古くからの傳統的信仰であります。かく其の國土と其の一切とを御産みになつた神が又國の主を御生みになつた。天照大神を御産みになりました。主といふものを産むといふことは、即ち國家を立てるといふことなのであります。天然の國土には別に主はない。然るに國土民人を産むと共にその主を生むといふことは、國を産むことが即ち國家を造ることである。日本の國家は如何にも自然的の國家であります。さういふことは今日どういふ風に現れるかと言ひますと、國家の統一といふものが如何にも内面的である。内面的といふことは生活の總ての範圍に國家生活が行渡つて居る、國家生活といふものの他に、或は宗教の生活、或は學術の世界、文藝の世界、さういふやうに幾らか獨立したものであるのではなくして、凡そ人間の生活は残らず皆國家統一の中にある。先づ人間が働きを加へる天然、人間から言へば與へられたもの、人間の外にあるところのもの、それに人間の働きを加へて何か統一するといふことになりま

すると、さういふ統一といふものは外面的のものになる。外から統一したものになります。人間の生活は何處までも自然といふものを離れることが出来ぬ。人間自身が自然である。周圍に國土、草木が榮えなければ人間は一日も生きることが出来ない。其の自然といふものを外側から自然と餘程離れた人間といふものが統一する。さうなりますと人間と自然との關係がそれだけ外面的になつて来る。つまり支配するとか、征服するとか、利用するとか、さういふ意味が強くなります。人間が統一するところの自然が根本に於て自分と同じ根から出て居る、同じ根源から出て居るといふことになりますれば、自然に人間が働きかけても、働かれる自然も、働きかける人間も元來根が同じである。さうすると其の統一たるや内面的であつて、洩らすところがなく皆残らず統一する。我が國體は先刻申しました國家統一といふことが中心になつて居る。併し今日言ひますところの政治といふことに限られて居らない。國家統一は今日で言ひますれば政治といふことが主であります。併し其の政治統一と言つても宜いかも知れませぬが、其の中に生活の有ゆる方面が含まれて居る。と言ふことは、抑々國の成立に於て自然と人爲とが一つ根柢から出て居る。そこで之を内面から言ひますると人間が自然に對して格別の親しみを有つて居る。國土其のものを愛する。さうして

其の中に住つて居るところの民族は互に最も親しい感情を有つて居る。其の主たるところのものは國土の生成と同時に國土を生成せられた同じ神が産まれたもの、生れながらにして君たるところの方である。生れながらにして君たるところの方であるといふことが日本にはある。生れながらにして君たるものといふことは、國家の眞實内面的統一の原理として、西洋の哲學者の中にも、これあらんことを希つたものもあるのです。けれども彼にあつては歴史上の事實がそれを許さない。この事は又後に述べます。生れながらにして國の主である。さういふ主は動かないところのものなのであります。人爲が一つも其處に入らないのであります。如何にも天然といふものの上にしつかり立つて居る。其の家に生れた長男は生れる時からもう既に其の家の主なのであります。今御生れになつたところの皇太子は御生れになると同時にもう日本の主であらせられるべきである。さういふこととに於て日本の國家が如何にも自然的になつて居る。其の統一が内面的である。従つて又最も全體である。そこに心を一にして上に親しむといふ最も内面的なるものが對應するのであります。内外相應したものと思はれるのであります。そこで國家に於て最も重んぜられるものは何であるかと言ひますと、民命—國民の生命であります。國民の生命といふものが國に於て最も愛重せられる



のであります。抑々生れたのであるからして産んだものが之を食ふのであります。父母之を産んでさうして父母が之を矢張食ふのであります。國の祖が産んだ所のものはまた國の祖を繼ぐものが之を食ふのであります。これを民命を重んずるといふのであります。

我が國は農を以て本とする。穂といふ字が能く國體を現す、瑞穂の國であります。穂と言ひますのは先づ以て稻穂であります。稻の種を天照大神が得られまして、是で蒼生を生かすことが出来る、さう御喜びになつて高天原の齋庭に御植ゑになつたと傳へられてをります。さうして天孫が此の國に御降りになります時に、其の稻の穂を御授けになりましたのであります。そこで齋庭の穂といふものが天祖から傳はつて居る。先刻申しました通り、吾々が今日生きて居る、米を食つて居るといふことは長い歴史を豫想して居る。そこで此の國に御降りになる、即ち此の日本を御建てになる其の際に先づ天上から持つてお降りになつたものが稻の穂である。即ち國家を建てられました根本が民命、民を生かすといふことである。生かすといふことは支那流に言ひますと生々發育である。日本の國こそさういふ生々發育の國である。生かすといふことは人類何處でも嫌ひなことはないですけれども、日本は格別生々發育の國である。西方淨土といふやうなことも勿論重大な意味が

あり佛敎で大に養はれたので決して貶す譯ではないのですが、併しさういふ敎は我が國の中からは生れて居らないのであります。東方日出づる國と昔から言つて居る。陽氣の發する處、或は天地正大の氣、さういふ言葉は日本人が儒學者と雖も能く使つたのであります。生かすといふことは國の根本に立つてをる。其の生かすといふことを爲さるところの國の君主は矢張生かすといふことに本づいて立てられて居る。即ち親子といふことに本づいて立てられてをります。吾子孫の王たるべきの地なり、汝皇孫ゆいて治らせし。天子の御位が産むといふことの上に基礎を置いて居るのであります。能く儒敎を貶すところの神學者は、孝といふことを支那で喧しく言ふものですから、是は支那の敎で日本の敎ではない、日本は忠といふことが本であると言ひます。勿論忠が本であります。併し孝といふこともその名はなかつたがその實はあるのであります。忠といふことと孝といふことは元來一つものなのであります。矢張父祖を繼ぐといふことが日本の天皇の位の定まるところであります。生れに依つて、種に依つて君となつておいでになつて居るのであります。種といふことは親子相續といふことなのであります。天然といふことが基礎であつて、別に君の徳を具へるとか、才略があるとか、一切さういふやうな人間の修養に依つて得たところのものでない。生れながらに

して君たるところのものなのである。さういふことは即ち之を道徳の言葉で言へば父子相繼ぐ、父子の道であります。父子の道といふことを取つてしまつては日本では君臣の道も立たないのでありますから、さうすれば支那から取つて来た譯でもなんでもない、矢張孝といふことは離れないのであります。親子の道を若し孝と言ひますと孝といふ方は子が親に對する方から言ふのでありまするけれども、元來が子が親に對すると親が子に對するとは一つものなので生の道であります。それで天壤無窮の神勅が日本の皇位の定まるところである。吾が子孫の王たるべき地と仰せられ、生れによつて定めておいでになる。そこで第二の神勅です。是も第二の神勅などと私が申すのではありませぬ。矢張古人がそれを申して居る。「之を見ることなほわれを見る如くせよ、殿を共にし、床を同じくし、以て齋の鏡と爲すべし。」これが寶鏡を取つて祝して曰くの神勅であります。是は明らかに親子といふことが述べてある。天壤無窮の神勅は君臣の道を述べて居られます。此の寶鏡を取つて祝して曰くの神勅には親子の道が述べてある。併し別々でない。其の皇位が神孫といふところに基くからして此の二つの神勅は離すことは出来ないものであります。親子の道といふことを寶鏡を取つて祝して曰くといふ神勅に基けるといふことは、先刻申しました會澤の「新論」に出て

居る。吉田松陰が其の説を聞いた時に、何處に其の出典があるか會澤翁に會つた時に、能く聞かなかつたから、もう一度あの根據を質して呉れといふやうなことを水戸に遊學して居ります友人に手紙をやつて言つて居りますが、併し能く考へて見れば、天壤無窮の神勅に既に親子といふことが出て居るのであります。さうしてそこに、殿を共にし、床を同じくして齋の鏡と爲すべし。是は公に於ても私に於ても——本當は天皇には私といふことはありませぬのですが、つまり表御所においでになつても内殿に御退けになつても、朝夕共に其の御鏡を御拜しになるのであります。それを齋の鏡と爲すべしと申されたことと思ひます。其の御鏡はわれと同體、われを見る如くせよと仰せられた御鏡であります。そこで天皇は朝夕天祖に御對面になつて居る。かういふことなのであります。是が日本の天子の御修養と申してよいかと思ひます。一般に宗教で言ひますと神の照覽始終天の神が見ておいでになる。さういふ心持で居る。さういふことを言ふのであります。支那の聖人の教では「君子終日當對越在天也」、さういふ言葉があります。朝から晩まで君子は天の神、即ち上帝と對面して居る、始終神と共にある。さういふのが即ち君子の修養なのであります。それは天である。上帝である。此の事を後程に少し御話したいと思ふのであります。上帝とか天

とかいふものは藤田東湖が批評して居るやうに、蒼々漢々、一體何處に天があるのか捉へどころのないものなのです。さういふものに對する、それは矢張君子の反省に於て形のない神の照覽といふことであります。我が國の教は何處までも自然で、自然といふことは身體を抜きにした精神といふことを言はないのであります。生きた心といふのは矢張此の肉身に宿るところのもので、宿ると言ふよりも心身元來一です。そこで、我が國の天子は御鏡といふ具體的のものに御對面になる。さうして之を見ることわれを見る如くせよといふ御言葉が次から次に生けるままに傳はつて居る。其の御鏡といふ實物が現存して居る。それと朝夕御對面なさつて居る天皇は天祖の御血統である。天祖の御血統の御身を以て、天祖が親しく御授けになつたところの御鏡と殿を共にし床を同じくし、朝夕御離れにならない。かういふところに精神の相續と肉體の相續といふことが寸分の隙間もないのであります。神勅といふもの、皇祖の御教訓といふものに由つて政治を爲さる、其の御教訓を御忘れにならないのが、即ち天祖に御對面になつて居ることである。さうして同時にそれは血胤上の御相續であります。

佛教の方で血脈といふことを能く言ひます。佛教は印度の釋迦から傳はつて居る。併し釋迦か

ら二十八代目が達磨である、釋迦から迦葉尊者、それから誰、それから誰、人から人に傳はつて行くのです。さうして二十八代目の達磨、それを初祖とする。神宗の方で言ひますと一番初で、それから二祖、三祖、それから六祖、自分は達磨から何代目である。さういふことを言ひます。これには意味がある。儒教の方で、宋の時代に程明道が孟子以來絶えて居つたところの道を千載の後に繼いだ。さういふことを自分が言つたのではないが、後の人がさう言つたのであります。それで日本で聖一國師が菅原爲長卿と攝政道家の家に會した時に、一方は坊さんの大立物なのである。一方は儒家の大家である。此の二人の偉い人が出會つたから一問答をやつてはどうかと道家が言ひました。其の時に聖一國師は自分は達磨から何代目である。生きた人間から生きた人間に、生きた言葉で道を傳へて居る。知らず爲長卿、あなたは孔子から何代目でありますか、さう聞いたといふことがあります。すると其の場で爲長卿は黙つてしまはれた。是はつまり唯文字書物の上で孟子以來千載絶えた道を傳へたと言つても、文字の解釋次第なのだから證據がない。生きた人に、ウンさうかそれで宜しいと、かう傳はつたものならば是は確かなものなのであります。そこで佛教では血脈といふことを言ふ、祖先の血が今日自分の血に流れて居る。さういふ風に生きたものから生きたもの

に傳はるといふことを重んずるといふことはさういふ譯であります。併し是は矢張教の上の子孫で肉體上の子孫ではないのであります。併し生きた言葉で傳はる所に生きたものがある。さういふことが現れて居ります。我が國では天祖の御子孫、御血統であります。さうして同時に天祖の御教訓、神勅といふものを承け繼がれまして、心身別れずに一緒に其の儘御繼ぎになつて居る、そこが身體を離れた精神といふことを言はないで、如何にも日本の教が自然的で、生きたものである、今日の言葉で言へば最も具體的のものである。神勅は一は君臣の道、一は親子相續の道、其の二つのものが一つになつて居る。さうして國民を生かす、即ち民命といふことを根本にしておいでになり其の御教訓の通りに代々の天皇が國を治められますのが即ち惟神治しめす天皇であります。惟神と言ひますのは天祖の教の通りに爲さる。少しも自分といふものを交ぜるといふことを爲さらないで、自分一個のものを少しも持出されないので、一から十まで皆神の通り、即ち御先祖の通りであるそれが即ち惟神治しめすである。その惟神の治は何であるか。國民を生かす、國民の生活といふことが根本である。其の教は何であるか。君臣父子の道である。民に忠孝を御教へになるといふことと、それから國民が生きて行くやうに治しめすといふこと、其の二つのものが一つになつて居り、

分つことが出来ないやうになつて居る。さういふ御教訓の儘に今日迄國を治めておいでになり、長く御治めになりますのが惟神の治であります。即ち敬神愛民の治であります。そこで祭政一致と言ひますが、天皇の御祭祀といふのは本當は朝から晩までが御祭祀の御境涯であります。後に御鏡が伊勢の皇大神宮に御鎮まりになりましたのですが、併しうつしの御鏡劍といふものがあり、毎日皇祖を御祭祀になりまするが、又別に特定の御祭祀といふものがありまして御祭祀になりまするが、皆皇祖皇宗と御離れにならないといふ意味と拜せられます。かく皇祖皇宗の御教訓に依つて政治を爲さるのだから祭政一致なのです。會澤は祖を崇んで民に臨むと書いてをります。祖を崇ぶとは祖宗の教訓に遵ふといふ意味であり、民に臨むとは政治をする意味であります。そこで政治の根本は祖宗の教訓でありますから政治と教は一つです。祭政一致といふことは同時に祭政教一なんである。其の政治たるや祭なのである。其の祭たるや教といふものを承け繼ぐといふことであり、教を繼承するとはそれによつて天下を治めることであります。祭政教一、三つ分れたものを一つにするといふのではなくして、元來そんな風に分れなかつた。後に分れたから、併せて祭政教一とかういふ名を付けるのであります。其の祭と政治のことについ

ては後に大寶令に神祇官と太政官といふものが載せてあるさうです。成程唐の制度を参考とせられ
ましても、神祇官といふ如きものがあつて太政官の上に位してをる。かかることは唐の制度には見
ない所である。そこで國體といふものがはつきり現れて居る。併しそれにも拘らず既に神祇官と太
政官とかう分けたといふことが祭政が分れた端になつて居る。既に古の如くに統一あることを得
なかつたのである。太政官ばかりでなくして神祇官があり、尙ほ其の二つの中で神祇官が上に位す
るといふことは國體を忘れては居らぬけれども、二つに分けたといふことはもう本から遠ざかつて
居る。

一番本は祭政といふものは分れない、其の儘祭が政になる。かういふことは歴史のことで、色
色専門家の研究もあるでせうが神武天皇の時、食國の政を申すまへつぎみと申しますは天種子命
天富命の職でありまして、天皇の御政治に與かる最も大切な大臣であつたらうと思ふのでありま
す。天種子命、天富命が即ち中臣氏、齋部氏の祖先で、祭祀のことを司り來つた神の子孫です。
即ち天兒屋命の子孫、それから布刀玉命の子孫、是は天照大神に仕へられました神で、即ち
祭のことを司る神であります。其の祭を司る家であつて、其の神が神武天皇の時に食國の政を

申すまへつぎみとして朝政を取るところの首班であつた。さういふ譯で我が國では元來祭祀が即ち
政治と一つものになつて居る。神の教の通りに政治を爲さる。そこで先刻申しました大化の新政に
も先づ神祇を祭つて然る後に政治を議すべし、さう申してある。此處も然る後と言つて居るのは幾
らか分れたところがあるのであります。本當は神祇を祭ることが其の儘政治でなくてはならない譯
ですが、段々外國の制度が入つて來たし、そこへ又社會生活が複雑になつた爲でもありませうが
分れる、分れるけれども先づ神を祭つて然る後に政治を議するのであります。かういふ風なことで
如何にも祭政一致といふことは疑ふことの出來ない、そして矢張今日も嚴然としてあることなので
あります。

宮中の祭祀といふことは宮中だけの事ではなくして、それが天下の政治の根本となつて居る。御
祭は御祭として爲さる、それと政治とは無關係であるといふことでなくして、宮中の祭祀は宮中で
爲さるのですが、矢張國家的のことなんです。皇家の大事は即ち國家の大事であります。我が國に
於ては祭祀は公共のことに屬する、我が國に於ては特別に宗教といふものを、國家の教育に持つて
來ないといふ譯は國柄の然らしめる所でありまして、宗教を無視して居るのではありませぬ。普通

人間の安心立命、或は救を求めるといふやうなことは大事なことですけれども、人々の問題でありますから、是は人々信じて宜いもので、強ひるべきものではないのであります。けれども神を祭るといふことは國家公共のことなのであります。其の國家公共の神を祭るといふ精神の上に日本人の宗教は十分あるのでありますから、他の宗教で養ふことは勿論妨げがないが、他から這入つて來ない以前は無宗教であつたといふのではありませぬ。他から這入つた教といふものも主として皇室が先に立つて御取りになつて居る。それで國民にも廣がつて來たのでありますから、勿論それはそれで宜いのであります。今日公の教育に一般的に持出さない、人々各自の教育、個人の修養の事でありませぬ。神を祭ることは國家公共のことで、その中に宗教の實も自から具はつて居ります。敬神を徹底すればそこに日本の教育は宗教的になるものがある。西洋では國家といふものと別に宗教といふものがあると言つても宜いのであります。各々其の起源を別にして居る。それが西洋の國家統一の吾々の國家統一と大に違ふ大事な點でありませうが、併し兎に角精神界といふものは宗教が統一して居ると言つて宜いと思ふのであります。大多數から言ひますと、矢張西洋は宗教に依つて精神界は統一せられて居る。さういふ人生に大事な宗教といふものが西洋からまた日本に入つて

來た。そこで日本はどうするか。徳川時代に儒佛の外に新に西洋の宗教が入りました。一時は非常に有力であつたのであります。それに對する對策と言ふと妙に聞えますが、矢張其の對策を會澤が論じて居るのです。當時この西洋の宗教に對し、我が國にはその類のものはないかといふと、さういふものが日本にはないのである、敬神の道と忠孝、それが即ち立派な宗教ではないか、彼にあるもので少しも我に缺けて居るものはないのである。敬神と忠孝といふことを以て彼の宗教に對するのだ。さういふことを會澤が言つて居るのであります。「豈辯を好まんや」といふ一篇を著して、キリスト教に對する日本の態度を述べて居ります。今日は西洋の宗教も矢張受け入れて人々の信仰、國の法に違はぬ限りに於ては、其の信仰が許されて居りますが、それがなくてはならぬといふ譯でもない。佛敎と雖もさうです。我々は國家其のものが宗教的なのでありますから、其の道に由つて宜い譯であります。一般の教育はそれで行くべきである。又宗教を學校教育に入れる譯には行かない。學校で佛敎の講義も出來ませぬし、バイブルを講義することも出來ない。教師自身の修養によつて行くのは宜いのであります。教壇に持つて行くことは事情の上からも出來ないやうになつて居る。併しまたそれに必ず由らなくても我が國には敬神といふことがある。其の敬神と

いふことを佛教、キリスト教で養ふことはそれは宜いのであるが、また敬神は敬神で立つことの出来るものである。日本の敬神は彼を信すれば此を信することが出来ないといふやうなものでないであります。

天然の野生の草木、それに人為を加へて立派な果物を造る。今日食べる稲でもさうです。何れ野生であつたのでせうが、野生の儘ではない。矢張り開作つて見てそして今日のやうな立派な米が出来たのであります。だから是は天然に人間の働きを加へたものである。然るに太陽の光と熱に依つて天然自然のものも育つのであります。人間の骨を折つて作つた稲だけに光と熱を與へるといふことはないのであります。又さういふものは人間の作つたものだから、光と熱を與へないといふこともないのです。太陽は天然のものでも人文に依つて發達したものでありましても萬遍に照し、さうして、太陽の光と熱がなければ野生のものも育たないし、又人間の骨を折つて作つたものも、如何に人間が骨を折りましたも矢張り太陽の熱と光がなくては育たないのであります。太陽の熱と光は自然と人文の如何を問はず萬遍に行き渡る、さうして兩方の根源である。野生のものは是は野生で其の通りであります。それから田畑に作りますところのものは人間が作つたものである。然るに

太陽は野生と言つて宜いか、野生と言ふことも出来ない。野生が太陽で出来るのでありますから、太陽自身は野生といふことは出来ない。又勿論人為でもない。人為に依つて如何ともすることの出来ぬものである。總てをあらしめるものである。自然も人文も皆太陽に依つて育つのであります。人間に色々の本能がある。慾望がある。喜怒哀樂の情がある。是は人間の野生であります。自然にあるものである。それからそこに本能から人倫といふ風のものを作ります。所謂立てる——人間の道といふものを立てる。愛情といふものは天然にあります、其の愛情といふものを訓練して、そして親子の道といふものを立てる。唯犬猫の愛情が人間の親子の愛情にはなりません。さうすると是は矢張り人間の色々修養が加はつたものになる。其の自然の喜怒哀樂、本能、慾望も、また人間の修養で立てたところの仁義道徳も、どちらも齊しくそれをあらしめるもの、太陽が野生もそれから人の作つたものも併せ照してどちらもあらしめるやうに、心の方で天然のさういふ心理作用とそれから倫理の活動とどちらにも跨つてどちらもあらしめるものは何であるかと言ふと、それを日本の國で清明心と呼んで居る。であるから清明心を以て打ちつけに道徳心とする譯には行かないのであります。但し清明心と言ひます時には既に一つのさういふ特別の名が付いて居るので

あります。さういふ時に幾らか日本的の意味が加はつて居るからして、さういふ點から成程それも一つの修爲であると言へぬこともありませぬが、併し清明心の清明心たるところはさういふ野生的でもない。自然の心理作用でもない、又修めて得たところの仁義の道でもない。併し清明心がなければ喜怒哀樂も起らないのであります。本能も起らない、又仁義道徳も起らない所の、一番根本と言へば根本、それに依つて總てのものが成立する所のものであります。本心といふことを言ひまするが、人の本心といふものは修養で出来たものぢやない。本心は直ぐに道徳ぢやない。本心がなければ人間に喜怒哀樂がない。色々の悪い慾望を起すのも矢張本心が根柢にあるからである。本心は善惡に拘らぬと言つても宜いものである。併し其の本心といふものが比較的明るとか暗いとかいふことは人の生れ付きである。所謂上智と下愚とは移らずといふことがあります。矢張さういふ生れ付き、本心の明かなものもあれば非常に暗んで居る、例へば皮が厚くて光が映らぬ曇りが非常に多いといふやうなものもある。さうするとそれを磨くといふことから言へば成程そこに修養といふことが入つて来る、歴史が入つて来る。併し本心そのものに歴史があるとは言へない。清明心には歴史がないものである。國體には歴史があるのですが、民族の性情、天然のものと、養ひ得たとこ

ろの國民的傳統的信念といふものをあらしめる根本を清明心と言ふ。然るに何故さういふ清明心を日本人の特色にするかと言へば、即ち全人類に通すべき心といふものの本當のところは日本人に比較的一段明るく、被はれて居るところが少ない、非常に正直な生れ付きである。餘りさう執拗でない、餘りさう悪い意味の慾が深くない。非常に清々しい生れ付きを有つて居る。であるから人の人たる本心といふものが、天然に比較的明るいからして、其の點から言へば修養努力を要することと少くして、日本人はさういふ人間の本心といふものを失はずに、比較的さういふものが明るく修養にも餘り骨が折れない。さういふことに付ては若し經驗的原因を擧げますれば色々あるのでありませうが、とにかく本然の清き明かな心をそのまま多く保つてをる。併し此の清明心といふものは是はそれのみに信賴することが出来ないであります。左傾に傾いた學生で非常に親思ひの學生があつた。さうすると忠臣は孝子の門に出づるといふことは當らないのであらうか、例外になるのであらうか。親思ひである、孝であるものなら又一方國に忠なるものでなくてはならぬが、人並み以上に親思ひであるところの者がさういふ思想を有つやうになつた。これはどういふことであらうか。是が矢張清明心とそれから教といふものを分けなければならぬ譯であります。親思ひといふ

ことはつまり人間生れ付きの美質で、清明心といふものが親思ひの方に現れたのであります。天然の美質といふことは洵に結構ですけれども、そのみに信賴することが出来ない。教といふものがないければならぬ。即ち歴史といふものを考へなければならぬ。親思ひである程の純真な學生であるからして、そこで思込んで、何か社會に不正義がある、一部に悪いことをして居る者がある、大勢の者が困つて居ると決めてしまふ。さうなると其の方に親思ひの深いほどの純真な心が働けば間違つた思想になるのであります。さういふ良い生れ付きが欲しいのでありますけれども、併しそればかりに信賴することは出来ない。日本人はさういふ美質に比較的富んでをるから清明心と名付ける。昔北條高時の爲に腹を切つた者があれば、其者は是は日本の國體から言ひますれば、所謂其の忠、忠にあらすである。併し其の眞實を問へば矢張主君の爲に殉死したのでありますから清明心であります。それを何處に向けるかといふことが教であります。畢竟教がなかつたからして、さういふ我が國體から言ひますると逆賊であるところの者に殉死する。殉死した者も逆賊同然であります。それは矢張清明心の向け處が悪い。清明心は野生も照す、人文も照す、總て皆それから出て來るものであります。それが、それ自身にかうといふ方向を與へないものなのであります。清明心

は本來を言へば日本人ばかりのものぢやない。つまり支那では忠信篤敬といふやうなことを言ひます。言忠信にして行篤敬といふやうなことを言ふ。或は、後には誠といふやうな一字を以て言表したのであります。外國でも矢張神に對する心持なんかを敬虔の心といふやうに言ひます。何もさういふものが日本人だけの持ち前ぢやない。凡そ心ある者は心の本體としてそれがあつたのです。併し日本人には本心が比較的良く明かである。それで素直であるからして、外國の教でもよいと思込んだら深入りをするといふこともあるのであります。日本人程他の文化を受入れるものはないと言つても宜い。と言ふのは、徳川時代でありますと漢學が學問全體である。支那の政治、道德の教が其の儘日本のものと考へたのも、言はば一種の清明心の働きと言つても宜い。だから清明心は結構であつても、其の清明心を導くものがなければならぬ。其の導くものは今日吾々が考へるのではなく、今日の國を成して居る根源、國體といふものに依つて其の清明心を導くのである。ですが其の清明心が日本人のは所謂清明心で、本心がはつきりして居るから、一度君臣の道が立ちますと絶對的になるのであります。億兆心を一にして、其の上を親んで離るるに忍びざるといふさういふ情が出て來る。だからさういふ情として、天然であつて同時に教に由つて出來たものであり

ます。隨て清明心を其の方に向けるやうに努力する。それが國の教、教育の仕事だらうと思ふのであります。

尙ほ此の自然の心と言ひますか、自然といふことは元來産むといふことである。つまり産むものは親なのであります。そこで産むといふことを一方で言ひますと親子といふことになる譯であります。我が國はさういふ自然といふこと産むといふことが本になつて居ります。そこで國の主であらせらるるところの方は愛民といふこと、支那で言ひます仁といふことが政治の根本である。天皇の政治の御心は即ち神の御心である。祖宗の御心、神の御心は即ち萬物を生む大自然の御心である。親の御心である。そこで、愛するといふこと、仁といふことに應ずるものは即ちそれに對する信頼、忠誠です。總てのことは片方といふことではないのであります。感あれば應ありといふことを支那人が言つて居る。聲があればそれが反響する。感と言ひますのは即ち天皇の愛民の御政治です。應といふのはそれに對して感恩の念です。上に親んで離るるに忍びざるの心が即ち應であります。さうあるのは矢張偶然でない。天皇の政治は愛民の政治である、誰も愛する人にはなづくのであります。それは自然の道理なのであります。其の總ての人を愛するところに自然に人が歸服するので

あります。君といふものは仁君であるのが當り前である。天皇と申すと既に愛民の仁君で、仁のあるところに人が歸する、それを主と仰ぐ、其の主と仰ぐところが即ち君なのでありますから、親心といふところが其の歸するところだから、親は即ち自分の主なのであります。親子の道と君臣の道が一つといふ深い理由がそこに自然にある。我が國では人情、義理といふことを言ひますが國の政治には大事な法律といふものがあつて、國法を立てられました、其の國法には少しも吾々が違つてならないのであります。併し日本には忠孝、仁義といふ教が古來あるのであります。國體の眼目は一つの感情である。其の感情といふものは偶然に起らない。歴史のものである。即ち仁に應じて忠といふものがある。一體一般に親心のあるところに人の心が歸するのであります。親と主人といふものは一つといふことが物の道理としてあるのであります。だから君臣にして父子といふことは道理から言ふと支那でも言ふのです。天子は民の父母といふことは支那人が言つたのであります。唯遺憾なことには彼はさう言つたまでで、道理はさう見たのですが歴史の實際とならないのであります。我が國では餘りさういふことは言はなかつたが、事實はさうなのであります。我が國では斯様な道理が歴史の事實として、道理を言はずに君臣絶對の道として實現せられ

てをります。

以上に申上げました如く國體は吾々國民の一人一人の方寸の中にある。上に對する絕對尊敬の心にある。又それに對應しまして、昔の言葉で言ひますると、惟神治しめす天皇、それが即ち國體である。其の惟神治しめす天皇、それに對しまする絕對尊敬の心、是は歴史のものである。建國以來の歴史に依つて成立したものである。其の歴史であるといふことは即ち祭政教一である。惟神治しめすと申しますのは、皇祖皇宗の遺訓に依つて御政治を爲さる、其の遺訓に依られまする儀禮が即ち國家の祭祀、即ち天皇の祭祀で、其の祭祀によつて天皇は心身共に皇祖皇宗と一つにおなりになる。全く其の御精神で政治を爲さる。すると其の皇祖皇宗の御精神は何であるかと言ふと、神勅に現れて居ります君臣の道である。其の君臣の道といふものが親から子に繼ぐといふ親子生命の道といふものと離れない。その生命即ち國民を生かすといふことが稻の穂によつて實にせられて居る。國の大祀である大嘗祭では新穀を皇祖天神に供せられることが眼目となつてをる。國民の生活全體といふことが神勅の内容なのであります。つまり君臣父子の道、そして國民を生かすといふこと、是は畢竟一つことになる。それが皇祖皇宗の御教訓である。歴代の天皇は一から十まで其の

通りに爲されて、それ以外に御自分の意見といふものを御有ちにならないのです。それ以外に個人的自我的意見といふものが天皇にはあらせられない。又國民は天皇の詔の通りに一から十まで順ふ。個人的自我的主張といふものを有たない。それでありますから上は天皇は祖宗の御精神の通りに、下は國民は天皇の詔の通りに、それが我が國の眞の姿である。さういふことを本居宣長も申して居られる。それで一面吾々臣民の心の中にあつては天皇に對する絕對尊敬、他の一面祖宗の御精神に依つて愛民の政治を行はせられる所の天皇、この両面が全然一であるのが我が國體であります。本居宣長は儒教に限らず、總て外教を退けて純粹に日本の道を明かにせられたのですが、本居翁が最も嫌はれました儒教といふものを極端に採つて來て神道を立てられた山崎闇齋、その山崎闇齋の神道の極致は君臣中といふ言葉で現れるのでございます。君臣中は君臣にして中といふ意味であります。先づ中と言ひますのは、今日の言葉で言へば絕對といふほどの意味であります。君臣にして中、君臣合一するところに絕對といふものが現前する。是は本居翁の言はれました今申しましたことと全然同じことなのであります。國體の信念は儒教を取つて解釋しても、外來の教を退けて純粹の日本の道を明かにせられましても、其の點に於ては寸分の相違がないのであります。絕對

に尊敬しますといふことは感情の言葉で申しますのですが、人の心の性質、或は心の本質は哲學的の言葉で申しますと統一性にある。それによつて日々の心の活動といふものが行はれる。又それに依つて心の落在するところがある、即ち安心をする、安んずるところがある。其の安んずるところに特に名を付けて統一性と言ふ。其のものを向うに廻して之を仰ぐ、それに歸依するといふ時に之を主と申します。であるから宗教の神も矢張主といふ名を用ひるのは人の心の自然である。主といふのは其處に吾々が歸屬する所、其所に吾々が安んじ統一せられるところであります。さういふ統一を得るといふ其の主たるところに歸一するのは、吾々の境涯で言へばどういふ境涯であるかと言へば心身一致の境涯であります。心と身體と別れて居る間は統一性を得不ないのであります。心身一致と言へば、畢竟分り易く言ふと言行一致といふことになるのでありますけれども、それは日常のことである。それを極致まで持つて來れば所謂心身一致の境涯である。身と心と離れて居る間は其處に間隙があるのであります。統一を得られないのであります。吾々が一心不乱になるといふのは心身一致の境涯である。そこで日本の國は最も能く統一せられた國であると言ふことは日本人の生活には抽象作用といふものが少ないといふことである。統一といふことはつまり生きるといふこと

なのであります。何處でも生きるといふことを言はないことではない。皆現在生きて居るのでありますけれども、日本の國程生きるとか産むとかいふことを言ふ國はないのであります。其の心身一致のところは吾々の本當に生きた時なのであります。其の心身が分れるだけそれだけ吾々の生きる度合が少ないと言はなければならぬ。心身一なるところに物心一であります。心と身と一つになる心身一が物と又一つになる。物は即ち吾々の外界として居るところの物である。だから心の眞の統一を得たといふ時は、此の自然界といふものは唯吾々の眼前に横はつて居るところの物質界ではない。吾々と矢張通じて居るところのものである。人間の生活は勿論一刻も自然界を離れることは出來ないのであります。空気を呼吸し、日光を浴び、水を飲み、色々のものを食べて居りますが、此の身體は自然界と絶えず交通して居ります。さうして居りながら心が自然界といふものを餘所にして居るところがあるのであります。心身一であれば其の結果物心一になる。物心一になつた時には全宇宙といふものが統一の状態にあるのであります。自然界と自分の心と一つになつた時にはそれが本當の統一なのであります。昔は天地は活物であるといふことを言ひました。天地は活物であるといふことは自分の外にさういふ活物が動いて居るのではなくして、天地が活物であるといふのは即ち

生きて居る、自分と交通するところがある、それで一といふことを感ずる。其の時に如何にも天地が活物であると感ずる。其の時、物と心總てのものが一つになる。さういふことを統一を得ると稱する。即ち普通の言葉で言へば生きるといふことであります。自然界を向うに廻して吾々が之を征服して居る間は生きて居らない。向うを物質的に取扱つて居る間は吾々自身もそれだけ機械的になつて居るところがあります。自然征服といふ思想は日本固有の信念に最も反對のものなのであります。全然相容れないところの思想である。物心一つにして總てのものが統一せられて居る。さういふ一切の生活の統一、其の一切の生活の統一、それを天皇の治しめすと申すのであります。天皇の治、國を治められます。天皇の治と申しますのは即ち生活一切の統一のことを申すのであります。萬民諸共に萬物をも統べられるのであつて、土も木も我が大君の國なればとも申したのであります。だからそこに治める者と治められる者との間に寸分の際がない。残らずが大君に統べられる。それを闇齋の言葉で君臣にして中と言つたのであります。臣民は天皇に於て安んずるのであります。

四、國家的統一の具現について

統一といふものが唯統一といふ言葉でなくして、さういふ概念でなく、我が國に於ては現に生きて居るところの人の上に其の統一といふものが實際となつて來るのであります。會澤の言葉で實といふことを申しました。我が國は實の國である。實際になつて來る、實際になるといふことは即ち生きることなのであります。凡そ生きて居るものは皆身體のあるものなのであります。精神が生きてると言ひます。楠公の精神は生きて居られると申すのも、曾て何百年前楠公といふ肉體を有つて居るところのさういふ生きた人間が出て働かなくては、唯空に精神といふものは生かないものなのであります。統一といふことの一番近いものは即ち生物なのであります。生きて居る身體を離れては精神といふものは抽象的になる。後世に影響を及ぼすと言つても曾ては釋迦も孔子も矢張生きた人間であつたからであります。さうせぬと實にならない。働きを現さないのであります。それで我が國では其の統一といふものが生きた一個の人間の上に實になつてゐる。生きた一個の人間は即ち自然人であります。自然といふものは人間業で如何ともすることの出来ないものであります。どんなに自然科学が発達しても生物、生きた細胞を作ることとは出来まいと思ふのであります。人間は生物は作り得ない。吾々自身に於ても自分の心でありながら、自分の儘ならぬものがある。統一を得

た状態は自分の自由であつて、自分の自由でないところのものがある。それを心身一と稱するのであります。だから生き物は人間業を超えたものである。人間自身が自然でありながら、自然を超え
ることは人間には出来ない。そこでさういふ自然、英語で言ふ「ネーチャ」是が統一といふことを
實際に現して居る。段々思想が発達する。ものを考へることの非常に発達した民族にあつては、思
想、理論を重んずる。考へるといふことはものを分けるといふ働きであります。分解するところの
働きであります。そこで、元來一つであるところのものを先づ内外主客に分ける。思想で分けた
ものをまた思想で統一しても思想的統一だけでは眞實の統一を得ない、唯概念的統一に過ぎませぬ。
然るに我が國にあつては其の統一といふものが自然人の上に實になつて居る。其の一個の自然人と
申しますのは、一國の統一性の實である所では天皇を申すのであります。天皇は祖宗の御教訓の通
りに治しめす、それが皇である。神と皇とが一つ、神と皇との道直ぐにといふことを昔から言ひま
す。又勅命の通りに民が順ふ、君と民とは一つであります。民と君と一つになつたことを唯一つに
なつたといふのでは抽象概念である。何處にさういふ一つのものがあるか、それが即ち人間であら
せられるところの天皇の御身なのであります。であるから天皇は一度は國の主であらせられる。一

度は國全體であらせられる。國全體といふやうなことだけを幾ら言つても要するに抽象概念です。
此の身體を有つたところの生きたものに現れなくては眞の統一を得ないのであります。それが抽象
思想に狎れたものであるとさういふものよりも抽象的概念の方が如何にも高いものに考へられるの
であります。抽象的に言へば言ふ程深いもの、高いものに考へられるのであります。抽象に抽象を
重ねてこれが眞理であると言つてもさういふ唯の聲である。然るにさういふものになればなる程深
遠なものに考へるのは抽象思想の癖なのであります。

さて今一個人が自分の總てのものを差出してしまふとする。吾々一個人は總てのものを差出して
さうして剩すところがない。然るにこれに對して他の方では總て與へて剩すところがない。其の剩
すところなく與へるところのものを仁とか慈愛とか言ふのであります。即ち君のことであります。
總て差出してしまつて残すところがない、それを臣民といふ。人の君となつては仁に止まる、人の
臣となつては忠に止まる、仁と忠は即ち感應の一なのであります。所謂君臣中であります。さうい
ふことを我が國では一方敬神尊皇、天皇の方から申しますと敬神愛民、敬神愛民は即ち總てを與へ
て剩すところなく敬神尊皇は總てを差出して剩すところなきもの、さういふものが唯思想だけでな

くて具體化して居る。具顯して居る。それと比較しましてさうでないところのもの例を挙げますと、西洋で國家を人為的のものと見る説では、國家といふものを自然物と見ないのであります。無論國家は唯の自然物ではないのであります。歴史のものなのですけれども、すべて歴史のもの自然に根柢を有つものなのであります。其の自然といふものを抜きにして、全く人為に依つて出來たものとして國家を説かうとしたものは幾らもある。或る意味で殆んどさういふ説と云うて宜いかも知れぬ、其の代表の一人がフランスのルソーであります。ルソーの民約説といふものは即ち人為に依つての國家の成立を説かうといふものなのであります。其の國家の主たるもの、即ち國家的意志といふ風な考は先づルソーなどが大に唱へたものであります。それはどういふ風な考であるかと云ふと、國家を將來成すべきところの總ての個人が自分自身及自分の物を残らず皆出してしまふ。其の出してしまつたところに現前するものがそれが所謂ルソーの客觀的の意志である。客觀的の意志といふものは大勢の人の同意といふことと違ひます。皆個人個人が自分の意志を有つて居る。さうして相談をし合つて、其の點に於ては自分も承知である、それなら宜からう、其の點に於ては個人個人の意志が皆満足する。さういふものを衆個人の合意と言ふ。さういふものは畢竟個人

個人の私といふものの寄せ集めである。私といふものを幾ら澤山集めても公のものにはならない。是がルソーの考なのであります。それ以前の國家説から一步出たところのものであります。國家の意志といふものはさうでなくして、總て個人自身及自分の物を皆投げ出してしまふ、さうするとそこに誰の一個人の意思でもないところの客觀的の意志といふものが現れるのであると言ふのであります。もので言へば、例へば皆自分自分の金を出し合つて株式會社を立てる。株式會社の財産といふものは矢張其の株主の財産なのであります。會社の財産でもありますが、一人一人が皆其の財産の一部分を有つて居るのであります。寄附して捨ててしまつたものではないのであります。だから個人から言へば成程會社は公のやうであるけれども、併し個人個人のものでもある。然るに若し個人が寄附してしまへば、寄附してそこに出來た金といふものは最早個人のものではない。全くそれは公のものになつてしまふのであります。先づさういふ相違がある。併し財貨の如く物であるとするいふことがはつきり分るのであります。さういふ客觀的の意志といふものはどう現れるものであらう。ルソーの言ふ其の道理は聞えて居るけれども何處にどういふ形で現れるか、是が問題なのであります。是は西洋の思想では始終現れて來るのであります。國家論に限らず、例

へば道徳論であつても道徳は理性の法則である。如何にも理性の法則で個人個人の私でない。併し其の理性といふものは何處に現れるか。理性といふものが俺は理性だと名乗つて出るものでないのであります。形のないものであります。すると銘々己の言ふところも理性である、自分は理性に従つて判断して居ると言ふ。他の者はいや自分も矢張り理性に従つて判断して居る、かうなると畢竟個人個人の意見に俟つ外なくなるのであります。理性といふものが音聲として現れて裁決しないのであります。今ルソーの國家的の意志は、其のものがつまり法律の言葉で言ふと主權、國家の主權となる譯であります。其のものが立てたものが即ち國の法律で、社會契約の内容になるのであります。つまり國家的意志が立法する譯です。立法者になるのであります。然るに其の客觀的の意志、國家意志といふものが實際に於てはとんと役に立たないものといふことがルソーの説に破綻を來して居る。それは何であるかと言ふと、併てさういふ國家組織、立法はどうしてするか、個人個人の契約、其の契約の内容、國の法といふものはどうして出来るかといふ實際問題なのであります。ルソーは民約を歴史上の事實であるとはどこにも言つて居ませぬ。そこでかういふことを言ふのであります。さういふ立法者といふものはどういふ資格がなければならぬかと段々吟味すると、總て

の人の情といふもの、要求といふもの、欲といふもの、有ゆる人間の欲なり、情なり、希望なり、總てそれを皆自分自身は感じなくてもよく知つて居る、自分自身の中にそれを覺えなくても自分はそれを皆承知して居るところのものである。さうしてそれを皆満足させるやうに希望して居る。其の満足の中に自分は少しも與らない、自分といふものだけは除け者にして、残らずの人のさういふ希望といふものを満さうと念願して居るところのもの、それを満す爲に立てたところの組織、それが國家組織になる。其の組織の中には自分といふものは與らない、自分は全く其の組織を超越したものである。さういふ者こそ立法者の資格がある。かう言ふと何處にさういふ人間があるか。ルソーによればこれは人にして神、神にして人なるものなのである。さういふ者が出來て來なくてはルソーが期待したところの國家、その國家の立法といふものは出來ない。立法者はさういふ者でなくてはならない。少し歴史的になるが、昔の名高いギリシャの立法者リカルガスは先づ立法する前に自分は王族であるが其の王族といふものを脱してしまつた。其の國の生活の範圍外に自分が出てしまつて、全く第三者として、總ての人の利害に與らずして、總ての人の利害をよく満さうといふ精神でやつた者である。それは歴史に現れた不完全ながら先づ立派な立法者である。理想を言へば今

のやうな神のやうな人でなくてはならない。かういふことなのであります。さうしてルソーが期待した其の實現せらるべき國家はどういふものであるかと申しますと、人間は第一の自然に依つて——第一の自然と言ふのは第二の自然といふことを次に言ひますから其の意味を取るとさういふことになる。即ち生れたままであるといふと本能を有つて居る。それは生れたままの自由といふものを要求して居る。自然的の自由といふものを要求して居る。つまり思ふやうに振舞ひたいといふことなのであります。それは人の本能なのであります。人は自然のままでは本能の固まりである、自然的の自由を要求するところのものである。さて出来るべき國家、其の國家のことをルソーは市民的社會と名を付けるのです。市民的社會と名を付けるところにも西洋の水土といふものを反映して居るのであります。それは別問題として、其の市民的社會即ち國家に於ては其の本能といふものが正義に轉じなければならぬ。本能を正義に轉ずる。自然的自由を市民的自由に轉ずる。自然的自由は鳥が飛んだり獸が走つたりするやうに、思ふやうに振舞ひたいといふ事實、それを市民的自由即ち法律的の自由と國家的の自由に轉ずるのです。轉ずると言つても唯暫くさういふ風に裝うて居るといふのでは本當の國家にならない。其の國家に行はるべき正義といふものが第二の天性

にならなくてはならぬのです。前の本能といふ生れ付きが生れ變つて、さうして正義といふものが生れ付きであるかのやうにならなくてはならぬ。生れ付きの自然的自由といふものが變つて市民的自由といふものが丁度生れ付き其の儘のやうにならなくてはならぬ。さうせぬと今期待するところの市民的社會即ち國家といふものが成立しない。そこで立法者は第一の自然が作つたところのものを變へて、第二の造物主となつて人間を作り變へる、さういふ力量のある者でなくてはならぬ。即ち今申しました神の如き人でなくてはならない。すると初は國家といふものを人爲に依つて説明しようとして、終はどうであるかと言ふと人爲では出来ない。人爲であつても、それが天然の業であるかのやうでなくてはならぬ。人間のすることであつて、其の人間が神のやうな者でなくてはならぬ。かういふことになつて居る。前後大に矛盾して居るところがあるのであります。かういふ行詰りといふものを打開する道は何處にあるかと申しますと、國家の歴史性であります。歴史のことは既に申しましたやうに、天然に基いて人間が修養したところのものである。天然の曇つて居るものを磨き上げたものである。國家に於て養はるべきところの、國家に於て行はるべきところの正義並に市民的自由といふものが、恰も自然を作つたところの主に依つて作上げられたもののやうでな

くてはならない。人とそれから天然といふものを合一したものが即ち歴史でありますから、此の説といふものは國家の歴史説に發展しなければならぬ。そこまで行き詰つて居る。ルソーには歴史説は出て居らない。然るに、十九世紀に入りまして、色々の方面から歴史の考が起つて來ました。それでルソーの説の展開すべきところを展開したものが先づヘーゲルと言つて宜いのであります。ヘーゲルに至つて國家の歴史性といふことの議論が確立したと言つても宜からうと思ふのであります。歴史といふものは天然を本とする。そこで先づ天然は何であるか。國家の天然は民族であります。そこでヘーゲルの國家といふものは民族的國家です。民族的國家といへば何か國家の特別のものやうに考へて居るかも知れませぬが、併し本當の國家はすべて民族的の國家でなければならぬと考へたのであります。何故ならば民族といふものは天然のものでありますから生きたものであります。單獨孤立的と考へられた個人個人が何かの目的で集合した社會といふ如きものでない。其の民族の生活を組織立てたものが即ち國家である。其の民族といふ生きたものの生活を組織立てた國家の上にヘーゲルの言ひます「法」といふものが實になつて來る。實といふ言葉を西洋の哲學者でヘーゲル程言ふ者はない。實でないものは理に於ては統一が具つて居て

も畢竟空なのであります。そこで「法」といふものは先づさういふ一般の具體的の眞理なのであります。ヘーゲルの考に依ると單に宇宙的の眞理と言つても空論になる、法は法の概念の發展であると考へる。ヘーゲルの概念といふものは自然を有つたものなのであります。通例言ふ所の概念とは全く違つたものであります。其の自然の中に籠つて居るところの本質的のものが實際になつて來る。自然といふものが根柢でないものは一つもないのであります。法の概念は法といふ生き物、それを内に有つて居る。それを實現して行くもの、生かして行くものが即ち民族といふ生き物の歴史的發展の中にある。其の民族生活の法的組織、即ち國家といふものをもう一つ生かすものが即ち生きた一個の人間なのであります。それがヘーゲルの所謂「モナルヒ」であります。これは自然人であります、一個の生きた人間といふものが絶頂に立つて始めて國家といふものが生き物になつて來る。色々のもの寄せ集めではない。そこで、ルソーの國家的意志ですが、さういふものは唯の概念です。ヘーゲルの所謂抽象概念であつて、生きてものを言ふものではない。ヘーゲルの所謂「モナルヒ」といふものになつて生き物になつて來る。抽象的人格、國家人だとか、法律人だとか、道徳人だとか、さういふ抽象的の「ベルゾーン」、さういふものは皆空位に過ぎない。さういふもの

を理論の上で立てても、そのものが實際に働く時には偶然的のものが働く。即ち時の輿論とか、民の聲とか、有力者の意見とか、多数決とかいふ風なものになる外ない。さういふものは生きた統一性のないものであります、即ち眞實なるものではありません。眞實性即ち生きた統一性はただ生きた一人の上のみ實現せられるものであります。國家の眞實性即ち國家の生きた統一は唯一人の生きた人間に於て實となるものであります。此の生きた人間といふものは人爲を超絶したものであります。才徳の者を探むとか、才徳によつて自立するとか、人望の歸する所とか、これ等は皆人爲の混入したものであります。皆それ／＼の程度で人間業であつて、人間業では人間は統一が出来ない。人間業を超えた所のものであつて始めて人間の統一が出来る。これが統一性の本質であります。自然の生れといふもの血統といふものこそ人爲を超えたものであります。ここに統一性が實にせられる。ここに人心が落在する所を得るのであります。ヘーゲルは此所を洞見したのであります。國家意志といふ如きもの乃至法人といふ類のものは理論上至極公平無私のものに聞えますが、さて實地となつては自からもを言ふ生き物ではないから、畢竟多數の意見といふ如きもの衆個人の合議合意といふ如き生ける統一性のないものになつて仕舞ふのであります。併し國家全體の生命と言へ

ば思想として尤も至極であり、いづれさういふものが生きて居なくてはならないのですが、生命は生命でありなすから、色々の生活方面を有つては居ても其れ等の寄せ集めでなく一箇の生きた統一體でなくては生命とは言はれないのであります。さういふものはただ自然に生ける一人の外には實とならないものである。それが無い以上は所謂國家意志と言ひましても實在しないのであります。ルソーの理論は尤もであつて、國家意志は、個人個人の唯合意ではない。個人が自己並に自己に屬するすべてを先づ捨てなくてはならぬ。さういふ風に私を捨てたところに客觀的意志が現れる、と言つたのは正しい議論と思はれる。唯さういふ客觀的意志といふものの實在を見ることが出来ない。すると國家意志は何であるかと言ふと、大勢の者が合議する合議で十人が十人まで賛成は決して出来ない。さうすると多數決にならざるを得ない。それは賛成であるとか、それには共鳴するとか、それには同意が出来ないとはいふ風なことか何かで取り決めてしまふ。それを稱して國家意志と稱する。それは一種の逃げ口上である。それは皆主觀的のものに過ぎない。法の具現者たるべき國家意志を眞實に具現する生きた一箇人格、才徳人望など偶然的人爲的なるものを超えた血胤によつて國家的意志を眞實に具現する「モナルヒ」を得て、そこではじめて國家は心身一如の實在的意志

を得る。さういふ風に論じたのがヘーゲルの國家實在説であります。それで國家は地上の神と言つて居る。勿論ヘーゲルが人格と考へて居るところのものと我が國で人格と言ひますものとは違ふ所が大にあります。ヘーゲルの人格といふものの終極の考はキリスト教の人格の考であります。祭政教一致に於ける天皇の御人格はさういふ意味の個人的の人格ではあらせられないのであります。しかし國家の眞の統一といふものを説くについてヘーゲルの説の如きものは私共では至れるものと思ふのであります。唯是が惜しいことには、歴史を説いて其れが唯説いた歴史に終つて居る、さういふ實際の歴史が西洋にないのであります。ヘーゲルはどうかしてドイツ民族といふものが此の眞の國家を實現しなくてはならない、其の「モナルヒ」といふものも、プロシヤ王を念頭に描いて、今にドイツを統一して、我が哲學で論ずるところの「モナルヒ」になるんだとさういふ希望を有つて居つたのであります。成程後に統一は出来ましたが、矢張カイゼルはヘーゲルの哲學説の通りの「モナルヒ」にはなれなかつたのであります。これは歴史といふものは自然を根柢とし、自然といふものは思想では造れないからであります。

支那の天といふ思想も矢張同じこととあります。天はものを言はないものなのであります。蒼々

漢々の中に天を祭り天を拜する。天命を承けて天子となるとは言ふものの、天が直ちに聲を發して命するものでないから、天に順ひ人に應ずると言ひ出す。民の聰明は天の聰明なりと言つて、畢竟民意を問ふ。大勢の者の希望するところが天の意だ、かうなつてしまへば天といふものは現實にならないものである。大勢の希望といふやうなものはしかし時の勢のものであり、偶然性のものであります。民の聰明が天の聰明だとは言ひますけれども、又他の一面では道に違つて百姓の譽を求むるなかれ、かう言つて居るのであります。大勢の者の求むるところに従つて、よい天子だと譽められるのが標準にはならない。人氣取りをやつてはいけません。すると民の聰明が果して何處が聰明であるか分らないのであります。そこには才徳智謀籠絡あらゆる人爲の餘地が満ち／＼てをります。そこで矢張天も或る具體的のものを現さなくてはならぬ。天禹に九疇洪範を賜ふなどと言つて、何か或る形が現れて來なければ、さうせぬと據り所がないのであります。しかし九疇洪範などは人謀たることは疑はれない。西洋の宗教で言ひましても矢張天に在します神だけでは始まらない。併し是はキリスト教といふものを信仰する、我は神の子なりと名乗つて出現した人間があります。我に従へよ、と全人類に呼びかける生き／＼した人間の音聲であります。キリストの言葉は神の言葉な



のであります。神の心其の儘を説いたものとして、キリストの言葉といふものは福音として儼然として傳はつてをる。今に其の教を見る事が出来るのです。丁度論語に矢張孔子の言葉が載せてあるやうなものであります。孔子も「天徳を予に生ず」と自から名乗つて、天の道を生身の上に具現して、その言動とそれを傳へた言葉が萬世の師表となつてをります。それで支那の天も始めて實となるのであります。國家の客觀的意志とか、或はもつと一般的に理性の立法とか、さういふ抽象概念ではないのであります。斯様斯様にせよ、するなと具體的の教が示されてをります。それで實際を重んずるイギリス人の道徳論は理論は何か不完全のやうですけれども、矢張さういふ具體的のものを求める、實力のあるところの主人、制裁を加へるところの主人がなくては道徳法は成立しないといふやうなことを言ふ。如何にも機械的に聞えますけれども、明らかに實地の指導を與へることが出来るのであります。さういふものは據り所のあるものであります。

我が國では紛れもない神勅といふものが傳はつて居ります。其の神勅を下された皇祖皇宗の血胤であらせられるところの天皇が儼においでになるのであります。寶鏡といふものが現在する。鏡といふものは實物であります、之を見ることなほわれを見る如くせよと仰せられた神代の昔から

傳はつて居るところの寶鏡といふものが皇祖神靈の在します所として嚴存する。藤田東湖の所謂巍々たる勢廟として、皇室國家の最高至貴の實在であらせられます。齋部廣成が「古語拾遺」に、神物靈蹤が今も尚ほ嚴存す、と申して居る神物は天祖から傳はつた皇位の信の神器であり、靈蹤は高千穂の峰、笠狭の岬の如きであります。これ等に對して抱く國民の信念といふものが、實に國家の存続の大なる原動力であります。斯様な實力を有つ傳統的信念に較べますと、たとひ心血を濺いで構造した國家法理論であつても、それが國の歴史的信念と生きた連續のないものである限り殆んど一時的のものであり、孤立的存在であり、實力に於て畢竟微弱なものであります。天皇は神胤の身であらせられ、神代から傳はり傳はつた代々の祭祀を繼承せられて、歴史的の御修養によつて皇祖の教を現身の上に體現せられまして、それが國家の政治として實際となつて來ます。生きた人間から生きた人間に傳はりますから、現人神とも申すことと思ひます。さういふ具體的のものが日本の國家統一なのであります。我が國の神は唯支那の蒼々漢々たる天ではないのです。支那の天といふも元來は支那人の太古の信仰であつたのでせうが、段々その生きた信仰を失つて來ますと、天といふことは大に意義あることであつても具體化しませぬ。我が國では東湖の言つて居りますやうに、

上は日神と同體にましまし、下は巍々たる勢廟に精靈を留め給ふのであります。皆實物があるのであります。天皇はその生ける現身にましますのであります。さうして天皇の御位はちやんと坐が
あります。天皇の高御座、それは皇祖より傳はれる御位の具現である天津高御座であります。其
の高御座に御上りになるのが御即位であります。祖神の教を傳へられましたところの天皇、現人神
にましますところの天皇が口づからその教を國民に御授けになる。國民の教は佛敎から來るのでも
ない、儒敎から來るのでもない、その外何處から來るのでもない。天皇の敎詔であります。勅語は
即ち國民一般の生活規範であります。少しも紛らはしいことがない。一々明白にかうせよと仰せ
になつて居るのであります。理性の自己立法といふやうなものは道理あることであつても、自から
言はぬから内容がないのであります。これに内容を附與すると、意見區々となるを免れな
い性質のものであります。空漠と言へば空漠なものであります。敎勅はつきりして、生きて、具
體的である。何處までも心身一如であつて、上下これを遵守し實行し來つて、此の國を存続した歴
史的のものであります。だからして日本の國がよく統一を得るといふことは勢ひ然らざるを得ない
さういふ國であります。

そこで今吾々の國家生活内容は何であるか。これは敎育勅語にあります。天壤無窮の皇運を扶翼
すべし、是が日本人の生活の全内容なのであります。全内容と申しますのはそれが初であり終で
あるのです。それが手段となつて、それが種となつてその外に何か幸福とか、文化とか別のものを
得るのではないのであります。日本人の生活内容は何もかも皆この中に籠つてをるのであります。
今國家成立を個人主義的に考へて、國家の内容、目的は何であるかと言ふと、要するに最大多數の
最大幸福、出來るだけ大勢の人が夫々個人的の満足を得るやうにする、さういふ仕組みにするのが
國家組織の大眼目となる外はありませぬ。あらゆる個人の共存共榮に外ならぬ。だから國家は一
つの容れ物で、其の目的は、畢竟其の國家を成すところの個人個人の矢張個人的の意志を遂げる、
それを衝突のないやうに仕向けるのが法になるのであります。イギリス人は大體斯様に考へ、斯様
に行つてをるやうに見えます。イギリス生粹の道徳論として自己の幸福を無視することを是認した
ものは無いのであります。然るにドイツ人は如何であるかといふと、此の間私の學校の同僚の人
でドイツの知合が、ナチスの國家的の觀念といふものを言ひ現したものを送つて來たと言つて私に
見せられたのであります。かう言つて居る。其の意味は、ドイツ國といふものは現在今此處に

生きて居るところの五千萬か六千萬の個人の集りぢやないのである。所謂「フアーターランド」民族の祖先から傳へ來つてさうして今日に至つて居る。さうして今日生きて居るところの六千萬は之を又完全に傷けないやうにして後に傳へなくてはならぬところの一つの實在である。だからそれが即ち吾々の國家の内容である。國家といふものを現に生きて居るところの何千萬の固まりと見ない。従つて何千萬の個人個人の幸福が國家の主眼ではない。すつと前から流れて居るところの歴史的存在で、今日生きて居る何千萬人は其の一つの切斷面に過ぎない。大體かういふ考であります。して見ますれば、唯個人の集りと考へたのではないのであります。併し吾々から言へば其の「フアーターランド」といふものが何に依つて具體的に意志を現すか。ヒットラーといふ人間の意志が現すのか、國會を設けて大勢の評議で衆議一決、多數決が現すのであるか。それが、彼のヘーゲルの排撃するところなのであります。必然性を有つもの、生きたものが居らない。だから、カイゼルの意思が「フアーターランド」の意志であるか、ヒンデンブルグ大統領の意志がそれであるか。時勢の變に處しながら時勢の變を超えて一貫したものの、時勢の變を統制して行く、一貫不變の具體的意志を何處に得るか。歴史的一貫不變の精神を修養存續して一箇現身の上に具現する意志を得ないので

あります。唯個人の英雄的の素質に依つて國を代表する、といふ如きものは偶然的のものであります。祭政一致に於ては、建國以來の精神を祭祀に由つて、其の血統に於て、其の精神に於て一身に具現し、個人的自我無く唯神のままであるべき代々の修養を重ねて、これを實行して國を存續して來たといふ歴史を背後に有つて居る。歴史はつまり個人で言ひますると修養であります。修養は持續的實行である。その長い歴史を背後に有つて、それを間斷無く相續修養し來る一箇現人の意志に於て國家意志は必然性を有つて實となるのである。代表者ではない、表現ではないのであります。それが即ち現實の國全體なのであります。生ける國そのものなのであります。生けるにも實は程度がある、一個人も一箇信念に生きないものは十分には生きて居らぬ。一國の生きるにも程度がある。生きる程度は統一の程度にある。歴史を貫流する傳承的國民の信念に於て億兆一心であればあるほど統一が現實となる、國が生きて來る。何の處に億兆一心となるか。唯皇位に座します現人神の心に一となるのであります。億兆一心上に親しみ離るるに忍びざる一箇感情に於て一となる。このことを客觀的に言ひますれば皇運扶翼であります。皇運を扶翼すれば國が榮え民が幸福であるから文化が盛んとなるからといふのでは全然ない。皇運の盛といふことが國の繁榮民の幸福の實質であ

ります。皇運扶翼といふことが初であり終である。然るに學ぶや祿其の中にも言つてあるやうに、かういふ國でありますから矢張個人個人も満足を得て居る、久安長治の國である。我が國は人情義理が最も能く行はれる國であります。それは斯様な國柄であるからであります。何れ人の心の服する所は人情義理であつて、これは人心一般の道理だらうと思はれるのであります。君臣は義の大なるもの、親子は情の至れるものでありますから、我が國には一般に人情義理兼ね行はれる。そこでまた我が國は寛大な國である。すべて亂れが甚だしい所には刑は嚴であることが必要であり統一が根本に於て堅固であれば刑は寛大であつて宜しいのであります。我が國の如きに於ては刑の苛酷を必要としないし、又斯様な國の風として殘忍なことは自然に少ないのであります。不正はあくまで正して邪悪は容赦しないのであるが、さりとて酷刑の必要を感じない。我が國では刑といふものは非常に緩いのであります。是は我が國史の上に見えて居ることでもあります。日本の國程刑罰の寛大な國はない。人を怒する心が強い、忍びざる情が厚い。平和の精神に満ちて居るのであります。平治の亂後信西の計らいで廷臣三十幾人を刑したことは當時に於ても非難せられ、後世までも信西を忍人であると評してをります。朝權の盛んである時ほど酷刑は見えて居らぬ。武門の政治と

なつて往々刑を逞くして、特に戰國となつては自然に殺伐の風が起つたのであります。天皇愛民の政教の盛んである時極刑の必要の少ないのは自然であります。我が國の人情の何となく穩かであるのは唯法律權利を以て互に相制するといふやうな險阻な國柄でないからであらうと思はれます。我が國は忠孝仁義の俗の國であつて、國憲國法も天皇感民の徳の發現としてこれを遵奉しますので、法律づくめの國ではありません。西洋の古昔プラトーンすらも醫者と法律家の多い國は下等の國であると言つてをります。國民の體格が悪しければ醫者が繁昌し、國民の心が險惡であれば權利争が多し、法廷が榮えます。時勢の變の然らしめる所、生活の複雜化の致す所とは申しながら我が國の現狀は餘程歐米の法制的國風が浸潤してをるやうに思はれます。

日本は尙武の國である。かういふことも國體の中に入ると思ひますが、尙武の國と言ふは武といふ言葉が普通に解せられるやうに唯勁悍猛烈殺伐な國であると言ふのではありませぬ。藤田東湖が史實を擧げて切實に説明してをりますが、我が國の武は忠愛の心を本としてをります。古來武士の情といふことを言つてをります。帝國主義などと言ひますものは經濟戦争で、丁度眞綿で頸を締めるやうに他の國土人民をいつの間にか手に入れて仕舞ふ流義のことでもあります。然るに日本の尙武

は不廷を伐ち邪曲を挫く精神のもので、古來神兵といふ信仰を有つてをります。崇神天皇の時に大和の石上の神社に劍一千口を納められたといふことが史に見えてをる。それが何の爲かといふことが初は分らなかつたのであります。桓武天皇が都を山城の葛野に移されましたが、御評議に石上は餘り遠いからして緩急の間に合はぬから、そこであの石上に納めてあるものを山城に移さなくてはならぬ、といふので移されたといふことがある。そこで始めて神社に兵器を納められたのであるといふことがよく分つたのであります。つまり兵といふものは神の意を承けて動かすもの、神威を被つて行くものである。さういふ趣意が現れて居る。これは今日まで其の通りである。兵を動かすといふ時には日本では何時でも伊勢の皇大神宮、神武天皇の御陵、先帝の御陵、總て神、即ち皇祖皇宗に御告げにならないことはないのです。又兵を収めたときも一々これを神に御告げになります。そこで兵は即ち神兵である。是を以て幕末に於ては彼の會澤が西洋に對する對策を請じました。其の時に既に申しました通り宗教に於て我が國は敬神といふものがある。兵といふことが大問題です。それ付ては向ふに軍艦大砲があればこちらは砲臺を築かなければならぬ。色々さういふ手段があるやうだが、我が國の之に對する最も大事なことは我が國固有の神兵の精神で行くのだ。精神とい

ふものが先に立たなくては彼に對することが出来ない。彼は器を以てする。我は精神氣概を以てする。併し此の考は自ら限度があるので、矢張精神が主でありまして道具がなくちやならぬのでありますから、明治の維神は勿論西洋の文物を採られたのであります。其の神兵といふのは要するに士風士氣を養成する、其の士風士氣の兆すところが即ち神の道でありますから神兵と言ふのであります。これは、先に申しました寛容の風と尙武とが矛盾するものであるかのやうに見えるかも知れませぬから、さうではないといふ古來の説を申すのであります。今日も我が國の將士は、いつの戦勝も天祐である、御後威の御蔭であるといふ信仰を一般に抱いて居るやうであります。もう一つは吾々が今日租税を拂つて居ります租税の性質であります。今日一般に租税について考へられて居る所と、先に申しました天皇は萬民諸共に萬物をも統べ給ふといふこととの間には隔世の感があるほどの相違があるかと思はれます。租税は崇神天皇の時に始めて支那の言葉で言ふと租庸調の三種、即ち人夫に出ること、それから織物、それから田で作つたもの、さういふものを多寡を定めて徴されるやうになつたのですが、それ以前はどうであつたかと申しますと、黒川博士の調によりますると進獻である。その説によると次のやうなことになります。即ち進獻とは物を獻

るではなくして、兵役は生命を差上げるのであります。國土山海草木民人は天神の生んだ所、天神は即ち皇家の祖神に外ならぬといふ太古の國民的信念に於ては、土も木も我が大君の國であると論はれてをります。であるから我が國では元來残らずのものが神物であり、皇家の絶對有である。皇家から申せば赤子であるところの民の分願を遂げさすために、それ／＼に分け授けられたものである。國家統治の眞實性は斯様な人の最も利害を痛感する財物出費の如きものに對する態度如何の上、に事實的に見られるのであります。假令天皇の國家統治權といふ如きことを理論上いかほど完全なものとして論じたとして、租税を文字通りに分擔と思ふやうではその理論は眞實ではない。今日國家財政の建て方はどうでありましても、本の精神を尋ねると、租税を會社の費用分擔の類で國費分擔と思ふのは全然我が國體に合はないものと思ひます。既に徳川時代までは百姓は年貢として上納したのであります。分擔とは考へなかつた。さういふことが今に其の名残りのあるものであつて、矢張其の精神を失はないやうにする。失はないやうにするには此の國體といふものは生れたままの自然物でないからして矢張吾々が時々之を修養しなければならぬ。其ある毎に反省して、さうして政教によつてそれを育てるやうに維持するやうにしなくてはならない。民族性といふ天性、生れ付きば

かりを頼みにはならぬ。清明心もこれを時々磨くばかりでなく、またその清明心の向け所を誤らぬやうにすることが國の教の眼目とする所であつて、油斷のならないものである。

昭和十年十一月二十一日印刷
昭和十年十一月二十五日發行

日本國體（普及版）

定價金拾錢

不許複發

文部省思想局編

日本文化協會出版部

發行者 代表者 富野銳治 郎

東京市豐島區西巢鴨二丁目二七二

印刷者 山下謙之助

合資會社文光社印刷

發行所

東京市日比谷公園市政會館

日本文化協會出版部

電話銀座一一七四番
振替東京七三九八七番

日本文化協會出版部既刊書目

國民精神文化研究所

版藏所究研化文神精民國
(判倍六四) 册四全年一第

松本彦次郎 古事記の成立

定價拾五錢
三四頁送料四錢

紀平正美 真理とは何ぞや

定價參拾錢
九四頁送料六錢

吉田熊次 教育勅語換發以前に於ける
海後宗臣 小學校修身教授の變遷

定價參拾錢
八三頁送料六錢

作田莊一 國民科學の成立

定價拾五錢
四二頁送料四錢

國民精神文化研究所
研究生指導科編 時 行

定價參拾五錢
一七頁送料四錢

廣島文理大講師
金子大榮 國家理想としての四十八願

定價壹圓 送料八錢
四六列上製二〇九頁

思想問題小輯

文部省藏版(判六四)

文學博士 西晉一郎	我が國體及び國民性について	定價拾五錢 七〇頁送料二錢
文學博士 吉田熊次	思想問題と學校教育	定價拾五錢 六八頁送料二錢
藤澤親雄	西歐近代思想と日本國體	定價貳拾錢 九八頁送料四錢
文學博士 久松潜一	國文學と民族精神	定價拾五錢 六三頁送料二錢
文學博士 平泉澄	革命論	定價拾五錢 五七頁送料二錢
廣島文理大講師 金子大榮	日本佛教の精神	定價貳拾錢 七八頁送料二錢
文學博士 河野省三	國學と近世文化 (近刊)	

日本文化小輯

本協會編纂(判六四)

文學博士 紀平正美	知の組織と行の組織	定價拾五錢 六五頁送料二錢
金雞學院學監 安岡正篤	易學陰陽消長の理より見たる 學の維新と日本精神論	定價拾五錢 四七頁送料二錢
宮内省掌典 星野輝興	祭祀の本領	定價拾五錢 三九頁送料二錢
醫學博士 橋田邦彦	求道	定價拾五錢 五七頁送料二錢
廣島文理大講師 金子大榮	歸依三寶の精神	定價拾五錢 五三頁送料二錢
文學博士 諸橋轍次	儒敎の領域	定價拾五錢 五〇頁送料二錢
文學博士 飯島忠夫	皇道思想の覺醒	定價拾五錢 六七頁送料二錢

日本精神叢書		日本文化小輯	
(文部省藏版) (菊判)		(最新刊)	
文學博士 久松潜一	日本精神歌集	文學博士 河野省三	三社託宣の信仰
定價貳拾錢 六四頁送料四錢		文學博士 川合貞一	我が國家社會の本質
		文學博士 伊藤忠太	神社建築に現れたる日本精神
		文學博士 鈴木大拙	禪と日本人の氣質
		文學士 石川謙	心學精粹
		文學博士 河野省三	歴代の詔勅
		文學士 石川謙	心學精粹
		文學博士 河野省三	三社託宣の信仰
		文學博士 川合貞一	我が國家社會の本質
		文學博士 伊藤忠太	神社建築に現れたる日本精神
		文學博士 鈴木大拙	禪と日本人の氣質

國民精神文化研究		憲法教育資料	
國民精神文化研究所藏版		文部省藏版	
第二卷上册(四六倍刊)			
久松潜一	志田延義	河野省三	西晋一郎
古代詩歌に於ける神の概念	我が國上代の國體觀念	天地開闢即國家建立	加藤虎之亮詩教と皇道
定價壹圓貳拾錢 四一〇頁送料拾四錢	定價拾五錢 三八頁送料四錢	定價拾五錢 四一頁送料四錢	定價參拾錢 六七頁送料六錢
			山本勝市
			共産治下に於けるロシア農民の生活
			帝國憲法制定の精神
			歐米各國學者政治家の評論
			伯爵金子堅太郎
			文學博士西晋一郎
			日本國體
			四六版定價拾錢 八九頁送料二錢 (會員用菊判別製)

355
10/0

國民精神文化研究

國民精神文化研究所藏版

第二十七冊 (四六倍判)

小野正康	日本學としての學問教育	定價 五拾錢 一二三頁 送料 八錢
川合貞一	日本精神と社會の本質構造との關係に關する研究序説	定價 貳拾錢 五六頁 送料 四錢
海後宗臣 吉川熊次	教育勅語渙發以後に於ける小學校修身教授の變遷	定價 六拾錢 一五五頁 送料 八錢
河村只雄	家族の起原	定價 貳拾五錢 七四頁 送料 六錢
藤澤親雄	政治指導原理としての皇道	定價 拾五錢 三九頁 送料 四錢
作田莊一	經濟生活に於ける創造者としての國家	定價 貳拾五錢 六七頁 送料 六錢
岡田恒輔	思想左傾の原因及び其の經路	定價 六拾錢 一六七頁 送料 十錢

終

